


911.32
H443

911.32-H443ㄅ

1200500756081



始



911.32
H443



芭蕉句集新講

服部 畊石 著

下卷



四條書房刊

下卷目次

| | | | | |
|-------|-----------|----|-----|------|
| 元祿三年、 | 四十七歳、 | 六 | 四句 | 五三七 |
| 同 四年、 | 四十八歳、 | 一一 | 三句 | 五九六 |
| 同 五年、 | 四十九歳、 | 四 | 九句 | 六九二 |
| 同 六年、 | 五十歳五、 | 五 | 七句 | 七三八 |
| 同 七年、 | 五十一歳、 | 九 | 〇句 | 七九三 |
| 元祿年中、 | 四十五—五十一歳、 | 九 | 句 | 八七六 |
| 年代不明、 | | 三 | 五句 | 八八一 |
| 疑問の一、 | | 一 | 六一句 | 八九七 |
| 疑問の二、 | | 二 | 四七句 | 九七三 |
| 誤 傳、 | | 九 | 四句 | 一〇〇五 |

總計 千五百十三句

620-254

芭蕉句集新講 下卷

服部 畊石 著



元禄三年 庚午 (四十七歳)

都ちかきところにとしをとりて

誰。薦。を。着。て。誰。人。お。ま。す。花。の。春。 (其 袋)
誰。人。か。薦。着。て。お。ま。す。花。の。春。 (芭蕉句選)

元禄三年の「其袋」にある。また「卯辰集」には端書が「湖水のほとりに春を迎へて」とあり、晋風

—元禄三年—

五三七

氏の「新編芭蕉一代集」収録の渡邊耕一郎氏所藏、正月十七日附、萬菊丸宛の書翰

いかにしてか便も無御座候。若くは渡海の舟やわれけん、病變やふりわきけんなど方寸を碎のみに候。されども名古屋のふみに御無事の旨推量に見え候。拙者も霜月末南都見物して、膳所に出越年、歳旦、京ちかき心「こもをきて誰人おます花の春」冬「初しぐれ猿もこみのをほしげ也」山中に子供と遊ぶ「初雪に兎の皮の髭作れ」南都「雪悲しいつ大佛の瓦ふき」京にて鉢叩聞て「長嘯の墓もめぐるか鉢叩」歳暮「何に此師走の市に行鳥」急便にて御座候。正二月の間いがへ御越し待居候。宗七も御噂申計に候。

といふのがあり、「蕉翁消息集」に正月廿四日附、北枝宛の書翰に、北枝の「元日や疊の上に米俵」の句を「京大津の作者も致稱美候」とほめて、其末に

「誰人か菰着てゐます花の春」何人かともいかに、御評待入申候。菰を着てたれ人おますとも。

とある。この二通の書翰によつて、(一)菰を着て誰人、(二)何人か菰着て、(三)誰人か菰着て、と推敲の順序が明らかにされる。近江の無名庵に四十七歳をむかへての歳旦吟である。

さらでだに華美を競ふ京洛の士民は、今や新春を迎へ、泰平を謳歌しつゝ、各がじゝ春服に妍を誇る

其中に薦を纏うて晏如たる誰人がおますであらうか、京都市にも必ずさういふ人があるはずであると主観を抒べたのである。

或はこれを、世人は皆春服であつて、薦を着てゐる人などはありはせぬ、と解する人もあるが、それでは「おます」が働かなくなる。「おます」は何うしても、薦を着てゐる人を優越な立場に置いて見なければ生きて来ない。

瀬田の祭見て来よ瀬田のおく

(花つみ)

「芭蕉句選拾遺」に「膳所へ行く人にと有」とある。現今の曆にはないが、十年程前までの曆には、一ヶ月の内に必ず節と中といふものがあつた。立春の如きは其節の猶残つてゐるものである。節とは日に關係なく其月の節が其日より初まり、中とは其月がそこに半ばすることを意味する、かくして十二ヶ月を二十四に区分し、これを二十四氣といひ、古支那曆では其一氣をまた各五日つゝ三つに区分し、これを七十二候といひ、廿四氣は各名をもち、七十二候は各種の自然現象を以て之を表す、即ち

陰曆立春の十六日めを正月の中として、これを雨水といひ、其日をまた雨水の初候と數へて、それを表すに「瀬祭魚」といふ語を以てする、其日は瀬が平常自己の食とする魚の爲めに祭るといふ觀念からの命名で、無論實在の事ではない、(豺祭獸、雀入海中爲蛤、などは皆同種である)、それを其まゝ俳諧の季語としたので、瀬が魚を捕つて自己の四邊身近くに並べて置くのをいふ。瀬田の奥あたりは、いかにもそんな事がありさうに思はれるので、膳所へ行つたらば、更に瀬田まで行つて、瀬の魚を祭るのを見て來よ、と云つたのである。

午の年伊賀の山中、春興

種。芋。や。花。の。さ。か。り。に。賣。あ。り。く。
芋。種。や。花。の。さ。か。り。を。賣。あ。り。く。
種。芋。や。花。の。さ。か。り。を。賣。あ。り。く。
芋。種。や。花。の。さ。か。り。に。賣。あ。り。く。

(己が光)

(今日の昔)

(泊船集)

(芭蕉句選)

「己が光」に「こたつふさげば風かをる也、半残「酒好のかしらも結はず春暮こ、土芳」ぬぎかへがたき革の衣手、良品」と四吟の歌仙がある。三年正月半過ぎに伊賀に歸省して、義兄山岸半残の家で興行したのである。

「蕉翁消息集」に三月廿三日附、嵐雪宛の書翰

(前略) ふるさとのかみが國中に三草の種をもちて「春雨やふた葉にもゆる茄子種」此たねとおもひこなまし唐辛「芋種や花の盛りを賣ありく」口にいへるまゝに申つゞけ候。御秀作御ゆかしく存候。

とあつて、三句連作の如くに見える、「一葉集」もそれによつて三句並出してゐる。然るに「蕉翁全傳」には四年正月の條に「こまかなる」の句をあげて

百歳子の宅にて歌仙の催し、此夜障事ありて五句にて止むとぞ。

とある、即ち「種芋」は三年で、「こまかなる」が四年とすれば、嵐雪宛の書翰は怪しく、また書翰を正しとし、三句連作と見れば、「蕉翁全傳」の四年説が怪しく、要するに兩立は出来ない。それで自分は三句連作説を採り、「蕉翁全傳」の「こまかなる」を四年としたのは、著者竹人の誤聞なりと斷ずる。

此句及び連作の二句ともに、實際に物の種をまいたといふよりは、むしろ三くさのものに寄せて自己の感懐を抒べた主觀の句である。或は現代の俳句觀念からはそれを容れないかも知れないが、含蓄をよろこぶ時代思想として、芭蕉の作品はさう簡單に表面からのみの解釋では許さぬものがある。「芋」とは他の生業に對しての俳世活を云つたので、其種即ち俳諧を教ふることを、我は、天下泰平にして花の盛りともいふべき今日に於て、あちらこちらとひろめる爲めに賣り歩く、と自己が生産的ならざる無用の事に四方に漂泊する境遇を云つたのである。

此種とおもひこなさじ唐がらし

(かくれ里)

前句及後句と三句連作である、詳細は前句を参照せられたし。「思ひこなさじ」は肯定せぬ、さうは思はぬの意。

今播くこの種子は、極めて平凡なやうに見えて、秋になつてあの辛い唐辛子を實らすとは、思ひこな

さじ即ち思ひもかけぬ、と俳諧亦必ずしも無用の長物にならず、又我爲すところの事必ずしも無意義にあらざることを云つたのである。

こ。ま。か。な。る。雨。や。二。葉。の。茄。子。種。
春。雨。や。二。葉。に。も。ゆる。茄。子。種。

(蕉翁全傳)

(蕉翁消息集)

前掲二句と連作なることは、前々句の條下に詳出す。春雨はすべてのものを生育せしむるので、或は慈雨ともいふ。今その恵みの雨が降つて居り、茄子種が二葉を出して萌ゆる、と、我俳諧の發芽し、前途多望なることを示してゐるのである。

園女亭

暖簾の奥ものゆかし北の梅
暖簾の奥ものふかし北の梅

(笈日記)

(芭蕉翁發句集)

渡會園女は一有の妻、伊勢松坂の人、後大坂に住し、更に江戸に移り、薙髪して智鏡尼といふ。此句は芭蕉が伊賀に歸省中松坂に園女を訪うての吟である。園女は「菊の塵」の序に

我此道に入りし始めは元祿二年の冬也。明る年の如月、彼の翁と爰の人會良など率ゐ來ませしに、しか／＼と告げれば、翁よろこびて、いかなる事をもつゞりてよと仰せたるに「花まではしくれてのこれ檜笠」といひ出でければ、やがて脇の句附てたうべて、更に「暖簾の奥ものゆかし北の梅」といふ發句をさへ聞えられしぞかしとある。

暖簾は商家の店にもかけるが、所によつては表と奥との隔にもそれをかゝける。此場合はそれで、暖簾の奥の馥郁たる梅がものゆかしい、と園女に對しての挨拶である。「北」とは表を南方に擬して奥を北方に擬したのである。

うぐひすの笠おとしたる椿哉

(猿 糞)

「蕉翁全傳」元祿三年の條に「伊賀にて百歳子(西島氏)のもとに、歌仙一卷」として此句があり、「何袋」に「元祿三年二月六日」として「古井の蛙草に入聲、乍木」陽炎の消さま見たる夕影に、「百歳」以下、村鼓、式之、梅額、一桐、槐市、吳雪、の歌仙がある

催馬樂に「青柳の片絲によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠」といふがあるので、和歌では屢梅を鶯の花笠とよんでゐる、それをこゝでは椿に轉じたのである。

椿の枝から花が一つほろりと落ちた、そこで、鶯の花笠を落したのがあの椿かな、と詠歎したので、落椿と鶯の花笠とから得た想で、現實には鶯の存在を必用としない、随つてこれは落椿の句である。

橋木子の許にて

土手の松花や木深き殿作り

(蕉翁全傳)

「蕉翁全傳」元祿三年の條に「橋木子の許(藤堂氏、本名丹羽)歌仙一折」とあり、「芭蕉句選拾遺」に

は「藤堂修理公の事となん」とある。本姓丹羽であつて藤堂修理と名のつてゐるのは重臣であらう。其邸は殿造りゆゝしく、土堤には老松が茂つてゐる、しかし櫻の木は見えない、そこで、花はや樹深きナラン、と、見えぬが花は何れ庭園の奥にあるだらうと想像したのである。

畑 う つ 音 や 嵐 の さ く ら 麻 (花つみ)

「花摘」は元禄三年の編であり、又「蕉翁全傳」元禄三年春の條に「三月十一日荒木村白髭の社にて」とある。荒木村は上野のすぐ近いところである。「一葉集」の端書に「木白興行」とあるのは、「木白」とは荒木村白髭からとつた號で、或は其社の神官ではなからうか。

「櫻麻」の名は花が蘇枋色であるからとも、又は櫻の咲く頃蒔くからとも云はれる、とにかく夏の季語であるから、こゝでは季語的效果をもつものではなく、これは畑打の句である。其あたりでは麻をまくために畑を打つてゐる、櫻麻といふ名から花に嵐を連想して、あの畑を打つ音もやまた嵐と思はるゝ櫻麻ならん、と、詞の綾を織り爲しての想像である。

木 の 下 に 汁 も 膾 も 櫻 かな (ひさご)
木 の も と は 汁 も 膾 も 櫻 哉 (三冊子)

「ひさご」は元禄三年の集であり、又「蕉翁全傳」元禄三年の條に「風麥亭にて」とあり、「花は櫻」には「元禄三年三月二日」とある。

風麥亭での歌仙は「明日來る人はくやしがる春、風麥ニ蝶蜂を愛するほどの情にて、良品」以下、土芳、雷洞、半殘、三園の連で、「簗虫庵小集」に載つてゐる。然るに「花は櫻」にあるものは、前半は風麥亭の歌仙と同じであるが、二表よりは句が全く別で、しかも末尾に

木白あとよりきたりければ、興に乗じて付延し侍る。
されどとり鐘に筆をとむ。

とあつて、前記の作家に更に木白を加へ、歌仙後半の十八句で足るべきものを、二十二句あるのは不思議である。案ずるに、風麥亭での會に、己に一卷の歌仙が完了したところへ木白がやつて來た。そ

こで更に一卷始めようか、それには時間が足らぬ、且はまた已成の巻の後半は多少意に満たぬところもあるから、いつそこ表からやり直さうではないか、といふやうなことで、木白も加はつて後半のやり直しをした。然るに後半が終つても時間はある興は盡きぬので、歌仙の約束なんと平氣で廿二句も續けたのであらう。芭蕉の拘泥せぬ風貌が偲ばれる。

「ひさご」にはまた別に「西日のどかによき天氣なり、珍碩「旅人の風かきゆく春暮て、曲水」と三吟の有名な歌仙がある。

木の下に毛氈など敷いて花を賞する、汁といはず、膾と云はず、盃にも、人々の肩にも、落花片々と散りかゝり舞ひ來る、それを散りかゝると云はずにたゞ「櫻かな」と詠歎したのである。

いがの花垣の庄はそのかみ奈良の八重櫻の料に附られ
けると云傳へはんべれば。

一里はみな花守の子孫かや (猿 糞)

「蕉翁全傳」に「膳所に行とて道より物に書付て、半殘が許に來る二句」として此句と次の「蛇食ふと」の句をあげ、更に

右花守の句は、伊賀の國予野といふ所に、奈良の都の八重櫻の故事あり。古今著聞集、沙石集等に詳也。よつて此句あり。

とある。「予野」は伊賀國名賀郡花垣村大字予野で、故事といふのは、一條天皇の時、南都興福寺に命じて有名な其八重櫻を京都に召されんとした。奈良の大衆は、たとへ勅命でも名ある櫻はたてまつられぬとて拒んだ、天皇はこれを知り召されて、花を惜むは殊勝なりと仰せられ、伊賀の予野の庄を大衆に賜つたので、大衆は感激して櫻を京都に上り、其根を分つて予野に移殖し、そこを花の前と稱し、花の頃は周圍に垣を繞らして、里人宿直して之を守ることにしたので花垣の庄の名を得た、といふのである。

花垣の里人と聞けば今猶どこやら優しげであるが、この一里はすべて往昔八重櫻を守れる人々の子孫かや、と詠歎したのである。

蛇食ふと聞けば怖し雉の聲

(花つみ)

元禄三年の「花摘」にあり、四年の「勸進帳」には「山居」と端書があるが、前句に記した通り、近江へ行く途中の吟である。晋風氏の「芭蕉句集定本」には三年の部にあるのに、「新編芭蕉一代集」には元年説となつてゐるのは誤植であらう。

ほろろうつきとす、など云へば雉子の音もゆかしく思はれるが、蛇を食ふと思つて聞けばおそろしいといふのである。

鐘消て花の香は撞夕かな

(都曲)

元禄三年出版の「都曲」にあるから、同年又は其前の作と見る。

爛漫と咲き誇つてゐる花に、入相の鐘が鳴り、其餘韻が猶嬾々として絶えない。これは眞の鐘の音は消えても、花の香は猶それを撞いて餘韻をつとけしめてゐる夕かな、と詠歎したのである。

路通がみちのくに赴くに

草まくくらまことの花見しても来よ

(茶草子)

路通は蕉門の變り種で、一度は乞食にまで落ちてゐたのを、芭蕉が門弟にしたのである。

此句を極めて簡単に、草枕即ち旅寝に艱難して、都ぶりの花のみでなく、田園の自然の花をも見て来よ、と解する人もあるが、草枕の憂さつらさは、芭蕉より確實な體驗を経てゐる路通に、今更らしくそんな事をいふはずはない。芭蕉の路通に期待するところのものは、過去の生活の如く酒食に耽る様なことなく、人としての眞の道を踏む事によつて、偉大なる眞の花の心を感得して来よ、と云つたのである。

陽炎や柴胡の糸の薄曇

(猿蓑)

陽炎や柴胡の原の薄曇

(芭蕉句選)

元祿四年の「猿蓑」にある。柴胡は和名を野芹又は「あまあかな」ともいふ薬草である。此句は「糸」か「原」かに就て相當異論もあるが、陽炎は曇つてはたゞぬものであるから、「薄曇」はどうしても天候を云つたものとは肯はれぬ。故に薄曇は柴胡の糸即ち其若芽に就いてのものと見る。柴胡などの生へてゐる野邊に陽炎が立つてゐる、それで、あの陽炎はや柴胡の芽生の織葉の薄曇れるナラン、と、陽炎の形をそれと想像したのである。

ひばりなく中の拍子や雉子の聲

(猿蓑)

元祿四年の「猿蓑」にある。「三冊子」に

此句、ひばりの鳴つゝけたる中に、雉子折々鳴入るけしきをいひて、長閑なる味をとらすとして是を究、とある。

雲雀はチイチック〜と囀りつゝ、空へ上つてゆく、すると雉子がケイン〜と鳴く。あの雉子の聲は雲

雀が鳴く中の拍子やナア、と詠歎したのである。

君や蝶我や莊子が夢心

(書翰)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿三年説とするにしたがふ。

又同書所收の井上辰九郎氏所藏の孟夏十日附、怒雖宛書翰

。芳情精神不滯不恥大道自然之對談不安事共御座候。君や蝶我や莊子が夢心、筆の心殊之外よろしく筆人大道の筆意全工作之物と感心仕候。

とあり、「一葉集」には端書が

怒雖が製して贈りける筆の心殊によろしければ、とある。怒雖は筆匠であつたとみえる。

君はやかの夢の中に化したる莊子の蝶なる、或は我はや其莊子の夢心なる、何れか知らねど、お互の心のうちに一片相通じて相離れざるものがある、といふのである。

物ずきや句はぬ草にとまる蝶

(都曲)

元祿三年の「都曲」にあるので、三年又は其前の作と見る。

句はぬ草にとまる蝶、即ち世榮を事とせず無用の俳諧に遊ぶ我は、物好きやナア、と蝶に譬喩しての感懐である。

幻住庵

先たのむ椎の木もあり夏木立

(猿籠)

元祿三年の夏、近江石山寺の奥の幻住庵に入った、其時の文章幻住庵の記は「和漢文操」に

幻住庵の文は三通ありて、始の一通は落柿舎にあり。

といふ通り、「猿籠」所收のものと、「和漢文操」所收の二種と何れも、多少の變りがある、長文を三種

共にあぐるのは煩しく、また「猿籠」は何所にもあると思ふので、こゝには支考が「誠に此賦の花やかなる彼の記にはまさりておもしろきに、是を捨て、彼を取れる百世の師道をあふがざらんや」と云つてゐるところの「幻住庵賦」をかゝけ、他の二種は省畧する。

五十年やちかき身は苦桃の老木となりて、蝸牛のからをうしなひ、糞虫のみのをはなれて、行衛なき風雲にさまよふ。かの宗鑑がはたごを朝夕になし、能因が頭陀の袋をさぐりて、松嶋、しら川に面をこがし、湯殿の御山に袂をぬらす。猶うたふ鳴そこの濱邊より、ゑぞがちしまを見やらんまどと、しきりに思ひ立侍るを、同行會良なにがしといふもの、多病いぶかしなど、袖をひかゆるに心たゆみて、象潟といふ所より越路のかたにおもむく。さるは高砂子のあゆみくるしき北海のあら磯にきびすを破りて、ことし湖水のほとりにたよふ、鳩の浮巢の流とどまるべき芦の一片のやどりをもとむるに、その名を幻住庵といひ、その山を國分山といへり。古き御社のたゝせたまへば、六根をのづから清うして塵なき心地なむせらる、かの住捨し草の戸は、勇士菅沼氏曲水子の伯父なる人の此世をいとひし跡とかや。ぬしは八とせばかりのむかしになりて、棲はまぼろしのちまたに残せり。誠に知覺迷倒も皆たゞ幻の一字に歸して、無常迅速のことはりいさゝかも忘るべき道にあ

らず。山はさすがに深からず、人家よき程にへだたり、石山を前にあて、岩間山のしりへにたてり。南薫高く峰よりおろし、北風はるかに海をひたして涼し。おりしも卯月のはじめなれば、つゝじ咲残り、山ふじ松にかゝり、時鳥しばく過るほど、宿かし鳥の便さへあるに、木つゝきのつくもゆゝし。かつこ鳥我をさびしがらせよ、などひとりよろこぶ、そゞろにたのしみて、吳楚東南のながめにはぢず、五湖三江もこゝに疑はしきや。日枝の山ひらの高ねより、辛崎の松は霞こめて膳所の城は木の間にかゞやき、勢田のはしに雨晴ては、粟津の松ばらに夕日を残す。三上山はふじの佛にかよひて、むさし野の古きすみかも思ひ出られ、田上山に古人をしたふ。さゝほが嶽、千丈が峰、はかまごしといふ山あり。笠とり山に笠はなうて、黒津の里人の黒かりけむ。猶はた眺望くまなからんと後の峰にはひのぼり、松の棚つくり、藁の圓座をしきて、是を猿の腰かけと名づく。つたへ聞ぬ。徐老が海棠巢の飲樂も市にありかまびすしく、王道人が主簿峰の住るも爰を捨てうらやむべからず。虚無に眼をひらいて嘯き、屏風にしらみを捫て坐す。たま／＼心すこやかなる時は薪をひろひ清水をむすぶ。小齒菜ひとつ葉の、みどりをつたふとく／＼の雫をわびて、一爐のそなへいと輕し。前に住ける人もさすがに心高く、たくみける物數奇もなし。持佛一間をへだて、よ

るの物かくらふべき所などいさゝかしつらへたり。さるを高良山の僧正洛にのぼり居給ひしを、あ
る人をして額をこふ。いとやすらかに筆とりて幻住庵の三字をおくらす。其裏には予が名を書て後
見ん人の紀念ともなれと也。山居といひ旅寐といひ、させるうつは物たくはふべきにもあらず、木
會の檜笠、越の菅蓑ばかり枕の上の柱にかけたり。晝は宮守の翁、麓の里人など入きたりて、あ
しゝの稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ咄に日を暮し、かつはまれ／＼とぶらふ
人も夜坐しづかにして影をともし、罔兩に對しては是非をこらす。かくいへばとてひたぶるに閑
寂をこのみ、山野に跡をかくさむともあらず。病身やゝ人にうみて、世をいとひし人に似たり。
何ぞや法をも修せず俗をもつとめず、いと若き時よりよこさまにすける事侍りて、しばらく生涯の
はかり事とさへなれば、終に此一筋につながれて無能無才を耻るのみ。勞して功むなく、魂つか
れ眉をしばめて、秋も半に過行まゝ風景朝暮の變化とても、又たゞまぼろしの住むならずやと、や
がて此文をとめて立去りぬ。

「猿蓑」の幻住庵には此句があり、前掲「和漢文操」の幻住庵賦には句はない。

幻住庵は前掲の文章の如く、すべてが芭蕉の心境と合致して好き住るである。四面は折からの翠微

にかこまれて、その中に椎の樹がある、椎は風にもまるゝと茶色の葉裏を見せて、他の樹木の中に交つても一異彩をはなち、先づそれが目についたので、たのむ椎の木もあり、といったのである。

橘やいつの野中のほとゝぎす (卯辰集)

元祿四年の「卯辰集」にある。

橘が人家のほとりに咲いて居り、時鳥が一聲鳴いて過ぎたので、今は人家がかく立ち並んでゐるが、そのかみいつの頃か、このあたりで野中の時鳥の音を聞いたのであらうか、と心中に疑つたのである。

日の道や葵傾く五月あめ (猿 簀)

元祿四年の「猿簀」にある 晋風氏の「新編芭蕉一代集」所收、殿田良作氏藏の五月十日附、山口宛

の書翰に

(前略)とかく風雅は唯すがたをよく作り、尤意味深甚成事第一と御心得あるべく候。先は此句之たぐひ成べし「日の道や葵かたふく五月雨」とある。

五月雨ごろだからまだ向日葵は咲かぬ、蜀葵「おほあふひ」であらう、此花もまた日の方に向く性質がある。

此句は先づ、五月雨の降つてゐる中でも、葵は日の方向に傾く、と葵の性質を定め、さてそれが、「日の道に」でなく「や」とあるのは何故かに注意を要する。即ち葵が日の方向に傾くナラン、と日光はなすが葵の傾いてゐるのを見ての想像で、傾くと云ひ切つたのでないのである。

鏗 賣いかなる人を酔すらん (いつを昔)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」には元祿三年前とある。「いつを昔」は元祿三年四月の出版であるから

夏季の句は其以前の作と見るべきであるが、二年の夏は奥羽の旅中であり、また此句がどうも江戸での作らしい匂ひがする、さうすると少くも貞享四年まで遡らなければならなくなる、敢て武断せずに晋風氏に従つて三年の部に置く。

いづれ初松魚であらう、松魚くんと勢ひよく呼んで行く、かれはいづこのいかなる人を晚酌に酔はすらん、と疑つたのである。

草の葉を落るより飛螢哉

(いつを昔)

此句も「いつを昔」にあるので、元禄三年以前の作と知られるが、さていつとも定めがたいから、晋風氏の「新編芭蕉一代集」に従つてこゝに置く。

草の葉にはふ螢が、其草の葉を落るより早く飛ふ螢かな、と其動作を詠歎したのである。

勢田の螢見

ほたる見や船頭酔ておぼつかな

(猿 箋)

ほたる火や船頭酔ておぼつかな

(泊船集)

「一葉集」には端書か「上林三入亭」とあり、又晋風氏の「新編芭蕉一代集」所載、荒木文平氏舊蔵の卯月廿一日附、去來宛の書翰

今日宇治へ参候、貴丈も御出被成まじく候や、北元仙水子も参候管約束申候。大坂よりうちへ直ぐに杉風なども被参候様に申來り候。貴丈に御出候へば件の方勝手よく、御存知故一入に存じ候。愚老は此中上林三入所にて一句申候。「ほたる見や船頭酔ておぼつかな」右の句にて御坐候(以下略)がある、これによると、四月廿一日以前に於て、宇治の茶商上林三入の宅で詠んだので、「瀬田」は違つてゐる。

螢見や、と先づ當夜の遊びをあらはし、更に船頭が酔うて棹とる手元、舟べり踏む足元が覺束なし、と其中の一情景を點出したので、客もまた陶然たるさまが想見される。

頓て死ぬけしきは見えす蟬の聲
頓て死ぬけしきも見えす蟬の聲

(猿 簀)

(泊船集)

「芭蕉翁發句集」には元祿四年とあるが、四年七月出版の「猿簀」にあるから、夏季の句は其以前のものと見るべきで、晋風氏の「新編芭蕉一代集」の三年説とするは妥當である。關更の「俳諧世説」に

秋の坊は金城に名高き風流徳化の大隠者也。祖翁湖南の幻住庵におはせし時、「我が宿は蚊の小さきを馳走なり」との給ひて、一夜二夜かり寝せしに、翁隱遁者の身のうへの事、無常迅速の戒めなどいと懇ろに物語りあり、麓まで見送り給ひて、「やがて死ぬけしきは見えす蟬の聲」と一句の教誨ありしこの時のことにこそとある。

夏も關に蟬時雨のジーツといふのが聞える、それがいづれやがては死んで終ふのであるが、さうは思はれぬ、と客觀から無常迅速感を惹起したのである。

「は」と「も」は全く相反する性質であるが、此句の如く「が」で足るやうな軽い場合には、其代りに漫然と置かれたもので、「は」「も」それ自體の本質ではないから、どちらでも大差はないのである。

わが宿は蚊のちいさきを馳走也。

(小文庫)

我が宿は蚊のちいさきを馳走哉。

(泊船集)

わが宿は蚊のちいさきも馳走哉。

(芭蕉翁發句集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」には元祿四年説とあるが、前の「蟬」の句に引用した「俳諧世説」又「一葉集」の端書「秋の坊を幻住庵にとめて」とあるに由つて、此句も幻住庵での吟で、共に元祿三年たることを知り得る。

この幻住庵では折角とめても何のもてなしもない、たゞ蚊の小さいだけが先づ馳走である、といふので、第二の「かな」は更にそれを詠歎したことになるからよいが、第三の「蚊の小さきも」は、其外

にも馳走がある意になるので全然いけない。

夕にも朝にもつかず瓜の花

(藤の實)

「類柑子」に其角は「幻住庵にこまれる頃」と記して居り、「芭蕉翁發句集」にも元祿三年としてある。また露川は「夢三年」に

實に朝顔のあはれ、夕顔の貧しきにもよらず、欽然として此花の本性をつくす事、凡口に及ぶまじくや。

と云つてゐる。

夕顔は暮方咲き、朝顔は朝ひらく、然るに瓜の花は朝夕の共いづれにもつかず、といふのであるが、「猿蓑」所載の幻住庵記の末の方に

或時は仕官懸命の地をうらやみ、一度は佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して生涯のはかりごととさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。

とあるその如く、我生涯を考ふるに、官邊の人にもなれず、さりとしてまた僧にもならずして、終に俳人になつた、つまりどつちつかずの瓜の花だ、と自己の境涯を云つたものと見る方が、芭蕉の性格から見ても、また幻住庵にこまれる頃の作として、その文章に照應するものである。

花と實と一度に瓜のさかりかな

(木 枯)

晋風氏の「芭蕉句集定本」には元祿三年の部に收め、「新編芭蕉一代集」には二年説としてあるが、「芭蕉翁眞蹟拾遺」に落子宛廿三日附の

(前略)「夕にも朝にもつかず瓜の花」「花と實と一度に瓜のさかり哉」右兩句申入候、猶追々可申入候。

といふ書翰があつて、此二句は同時の吟たることが知られるので、元祿三年とする。

眞桑瓜が熟して居り、其傍には瓜の花が咲いてゐるので、花と實と一度に盛りかな、と詠歎したのである。

四條河原涼

川かせや薄柿着たる夕涼み

(卯辰集)

「芭蕉翁發句集」にも晋風氏の「新編芭蕉一代集」にも、元祿四年としてゐるが、四年五月出版の「卯辰集」にあるから、自分は元祿三年と見る。(「月見する座に」の句参照)「己が光」には

四條の河原すゞみとて、夕月夜のころより有明過る比まで、川中に床をならべて、夜すがらさけのみものくひあそぶ。をんなは帯のむすびのいかめしく、おとこは羽織ながう着なして、法師老人とも交、桶やかぢやのでしこまで、いとまえがほにうたひのしる。さすが都のけしきなるべし。として此句がある。

四條河原の納涼には、女も男も、法師も老も、さては桶屋鍛冶屋の弟子こまで打交りてうたひのしる中に、我は何の着飾るでもなく、さはぐでもなく、それらをよそに、ひとり川風を領して、薄柿色の帷巾のまゝに夕涼みする、といふのである。

結ぶより早。齒にひびく泉かな

(都曲)

結ぶよりま。づ。齒にひびく清水哉

(蕉翁消息集)

「都曲」は元祿三年五月出版であるが、「蕉翁消息集」には六月廿七日附の北枝宛の書翰に此句があり其文體が奥羽旅行の後らしく思はれ、又晋風氏の「新編芭蕉一代集」にも元祿三年説とあるに従つてこゝに置く。

未だ口にせぬうちから早くも齒にひびく感ある清水なるかな、と涼意を詠歎したのである。

合歡の木の葉ごしもいとへ星のかけ

(猿簞)

元祿四年の「猿簞」にある。此句は二様に解し得る。しかして何れも文法上破綻を來さぬから、何れに従ふも隨意である。

(第一解)「いとへ」を「いとふ」の第三終止格、即ち上部に「今宵こそ」の省略あるものと見る。合歡の葉は夕方になれば疊んでしまふので、平常の夜なればさまで妨げにもならぬが、星を賞する今宵こそ、その織き合歡の葉越すらもいとへ、といふのである。

(第二解)「いとへ」を命令格と見る。七夕の夜七個の池と稱して七の器に水を盛つて二星の影を映すそれらの事をする兒女に對つて、木の葉の邪魔になるところは無論避けべきであるが、あの織く睡つてゐる合歡の葉越すらもいとへ、と云ひつけるのである。

何れも星をなつかしむ意は同じであるが、自分は第一解を採る。

鳥部山

玉 祭 け ふ も 焼 場 の け ぶ り 哉

(笈日記)

「笈日記」京都の部に

是もいづれの秋にか侍らん。人間たゞ一日、朝暮鐘聲をへだつといへる、世の觀相たるべし。

とあり、「芭蕉翁發句集」は元祿三年として

前書、木曾塚草庵墓所近しと有り、

と記してゐる。「鳥部山」は京都で、昔からの墓地として有名である。

京都か近江か、それはとにかく、古き新しきさま／＼の精靈を迎へて祭るといふ今日もまた、茶毘に付さるゝ人ありとみえて、立ちのぼる焼場の煙かな、と死の無常を詠歎したのである。

雲竹自畫像

こ ち ら ら む け 我 も さ び し き 秋 の 暮

(笈日記)

「笈日記」京都の部に

是は湖南幻住庵におはす時の作也。君は六十、我は五十といへる老星一聚の前書侍りけるが、あやまりておぼえ侍らず。

とあり、また「芭蕉翁文集」には

洛の桑門雲竹の像にやあらん、あなたの方に顔ふりむけたる法師を畫て、これに讀せよと申されければ、君は六十年あまり、予は既に五十にちかし。ともに夢中にして夢の形をあらはす、是にくはふるに寢言を以てす。

として此句がある。北向雲竹は通稱八郎左衛門、名は觀、京都の書家で、芭蕉は此人に書を學んだと云はれる。

我も淋しさに堪へざるこの秋の暮なれば、君よこちらに向きたまへ、と畫中の人物によびかけたのである。

嵐雪がゑがきしに賛のぞみければ

葬は下手の書さへ哀れなり

(いつを昔)

元祿三年四月出版の「いつを昔」にあるから、元祿二年以前の作であることは確かであるが、端書から推測して江戸に於ての吟と思はれ、さて何年に定むべきかの考も定まらぬので、晋風氏の「新編芭

蕉一代集」の元祿三年前説とあるにしたがつて茲に置く。

朝顔はそれ自體がすでははれ深き風情のある花で、下手の描いたものすらあはれなり、といふので同じ門弟の畫でも許六の作品のやうにうまくはかけてゐなかつたと察せられる。

白髪ぬく枕の下やきりくす

(江鮭子)

白髪ぬく机の下やきりくす

(芭蕉句選)

元祿三年の「江鮭子」に「入目をすぐに西窓の月、之道」甘鹽の鬮かぞふる秋の來て、珍碩」と三吟の半歌仙があり「芭蕉翁俳諧集」「一葉集」ともに元祿三年としてゐる。

今は「機織」即ち「きす」を「きりくす」といふが、古くは「蟋蟀」即ち「こほろぎ」「つゞれさせ」「ちゅう虫」を「きりくす」と云つたのである。また「下」は「もと」「ほとり」の意である。きりくすの鳴く音が、白髪をぬく机のほとりやナア、と詠歎したので、爲すこともなく机に對つて白髪をぬいてゐると、こほろぎがそのほとりで鳴く、いかにも老境の秋の物淋しさが表はれてゐる。

海士の屋は小海老にまじるいと哉

(猿 簞)

元祿四年の「猿簞」にあり「泊船集」には「堅田にて」とある 後出の「病雁の」の句下参照。
海士が軒端の箆か桶かに小海老がびち／＼と蠢いてゐる、その中に飛び込んで、まじりうごめく籠馬
かな、と詠歎したので、堅田附近の實景である。

正秀亭初會興行の時

月しろや膝に手を置宵の宿

(笈日記)

月しろやに手を膝置雲の宿

(芭蕉句選)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」發句の部には元祿四年とし、連句の部には元祿三年としてゐる。「芭蕉句
選年考」は、元祿三年の「ひさご」に初めて正秀の句が見えたことから推して「三年の吟なるべし」

としてゐる、三年がよいと思ふ。この時「萩しらけたるひじり行燈」といふ正秀の脇がある。「雲の
宿」は誤である。「月代」とは月の昇らんとする前のほの明るさをいふ。

膳所の水田正秀の宅の會で、月は今しも東天に上らんとして、山の頂きにそれらしきほの明るみを示
して來たので、人々は山を離るゝ月を見逃さじと膝に手を置く、といふのである。

桐の木にうづら鳴くなる屏の内

(猿 簞)

元祿四年の「猿簞」にある。「三冊子」に

この句いかゞ聞侍るやとたづねられしに、何とやら一さまある事に思ふよし答へ侍れば、いさゝか
思ふ處ありて歩みはじめたると也。

とあり、「古今抄」に

鶉の一章は「田莊の酒家」といふ題ありて、こなたより其家の富貴を思ひやりたる様なりとぞ。し
からは五もじに句を切りて「桐の木や」といふべけれど、さいふは桐の木の發句ならん、是は桐に

も鶉にもあらず、田家を稱する發句なれば、「鶉鳴くなり」と句を切りて、塀の内を隔つべきにもあらず、況んや「鶉鳴くなる」とは、句法に古歌の裁入なるをや、今や「に」の字の働きを評せば、遠く田家の白壁を見やりて、其桐の木に富貴を思へばと、爰に心をめぐらすべき也。云々とある。支考の評の「遠くに田家の白壁を見やりて」或は「富貴を思へば」はあたらぬが、鶉は季語で、中心たるべき題意は田莊酒家なりとする點はあたつてゐる。

田舎の酒造家で、何れ邸宅も藏も立並び、そこには桐の木が植ゑられてある。その桐の木のほとりに鶉が鳴なくなる塀の内かな、と、其邸宅の風情を詠歎したのだが、「かな」は省略されてゐるのである。かゝる句法を十九心切の格と云ふのである。

木曾塚の舊草にありて、敲戸の人々に對す

草の戸を知れや穂蓼に唐がらし

(笈日記)

「笈日記」湖南の部に「元祿三年の秋ならん」として此句と次の「稻雀」と並出してある。

粟津の無名庵で、來訪の人々に對して、人々よ、あへて菊の芳香も蘭の清香もなく、たゞ穂蓼と唐辛となる此草庵を知れや、といふので、即ち我はどこまでも、穂蓼と唐辛子の野趣を愛するものなることを認識してくれといふのである。

稻すゝめ茶の木畠や逃ところ

(笈日記)

「笈日記」には前句と並んで出てゐる。

田は饑かに黄金の色をたゞよはしてみゆり、何十羽とも數知らぬ雀がちゝめきながら餌を啄んでゐる。その稻雀はもしや農夫に逐はれたなら、あの茶の木畠をや逃げ所とするならん、と想像したのである。

猪もともに吹るゝ野分かな

(江鮭子)

元祿三年十月出版の「江鮭子」にある、晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿元年とあるは「三」の誤植であらう。「篇突」に

猪の野分のすさまじさ、臥猪の床は宵の程に吹まぐられ、松も檜もくつがへりたる風情言外にあり。俊成卿、野分の題には草木の上をむすぶを本意とはいへり。當時傘のふり來るなど云句まれく見えたり。

とある。然るに「幽蘭集」に「猪の吹きかへさるゝ野分かな、正秀」とあるは暗合であらうか。野分の風が曠野の木も草も吹き倒さではやまじとばかりすさまじく吹く、その中にかの獐猛な獸もまた共に吹かるゝ野分なるかな、と詠歎したのである。

澁柿や一口はくらふ猿のつら

(芭蕉句選拾遺)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」考證の部に元祿三年説とするにしたがふ。

山裾の畑に澁柿がひしくと赤く色ついて、ふと見ると其枝に猿が一疋ゐる、その面がまへが、澁柿

もや一口は食ふナラン、と想像するに値したのである。

聲澄て北斗にひゞく砧かな

(都曲)

元祿三年五月出版の「都曲」にあるから、元祿二年前の作たることが明かである、しかし何年とも定めかねるので、晋風氏の「新編芭蕉一代集」の三年とするに従つてこゝに置く。

とん／＼と打つ音が澄みに澄んで、北斗星のかなたまでもひゞく如くに感ぜらるゝ砧かなと、詠歎したので、秋昊の澄徹さがよく描き出されてゐる。

雁聞に京の秋におもむかむ

(消息)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿三年として収録せる西村燕々氏所藏、怒雖宛、季秋末とある書翰(前略)拙者堅田より一昨日歸帆仕候。少用の事御座候て上京仕候間、近日罷出候て得貴意候、(下略)

として此句がある。

嘗て筆を贈られた怒雖に對して、近日中に雁聞きに、即ち足下に會ふ爲めに、みやこの秋にそちらへ出向きませう、といふのである。

堅田にて
 病雁の夜さむに落ちて旅ね哉 (猿 養)
 病雁の堅田にありて旅寝哉 (枯尾花)

元祿四年の「猿養」にある。「去來抄」に此句と前出の「海士の家の」句を併出して、

猿養撰の時、此うち一句入集すべしとなり。凡兆曰、「病雁」はさることなれど、「小海老にまじるい」とは、句のかけりことあたらしく、誠に秀逸なりといふ。去來曰、「小海老」の句はめづらしといへど、其物を案じたる時は予が口にも出でん、「病雁」は格高く趣かすかにして、いかでか爰を案じつけんと論じ、終に兩句とも入集す。其後先師曰、「病雁」を「小海老」など、同じごとくに論

じけるやと笑ひ給ひけり。

とある、また「芭蕉句選年考」に

或人曰、病雁の句、芭蕉病中の吟なり、海士が家の小海老の句と二句とも、江州堅田本福寺にての吟にして、院主は李由といふ、云々

とあるが、本福寺は千那の寺である、此二句は本福寺滞在中小恙を得て出来たので、「猿養」を選中の去來、凡兆に此うち一句入れよと云ひ送つた、凡兆は印象明瞭な「小海老」をとり、去來は含蓄深い「病雁」をとつた、そこに去來と凡兆の個性が見えて面白い。「枯尾花」の「堅田に下りて」は記憶遠ひであらう（其角忘句の癖ありといはれてゐる）「夜寒」は此句の命である。

晩秋の夜はそとろに寒く旅情をしていよ／＼濃やかならしめる、折から一つらの雁が空に鳴き連れて過ぐる、其雁と病める我と宛も同化した如くに思はれて、病む雁のこの夜寒に落ちて、こゝ堅田に旅寐することかな、と詠歎した含蓄の深いものである、故に凡兆の評に就て「病雁を小海老など、同じ如くに論じけるや」と笑はれたのである。

きりくす忘れ音に啼巨燧哉

(蕉翁全傳)

「蕉翁全傳」元祿三年の條に「水固宅にて、此句にて一折あり、水固松木氏、後非群といふ」とある。秋は盛んに鳴いた蟋蟀も、いつしか鳴く音も稀になつて、鳴きてはやみ、しばし途絶えてはまた鳴く火燧かな、と詠歎したので、聞く人は火燧に暖まりながらの佗住みであり、床下には蟋蟀が、地爐のことゝて他の部分よりは若干の暖氣があるので、其火燧のあたりに鳴いてゐるのである。

舊里の道すがら

しぐるゝや田のあらかぶの黒む程

(泊船集)

「芭蕉翁發句集」に元祿三年とある。

稻は悉く刈られ、田の面には其あら株がまだ青みを保つて残つてゐる、それを黒く朽ちさせるほどに時雨るゝやナア、と田園矚目の詠歎である。

こがらしや頬腫痛む人の顔

(猿蓑)

「頬腫痛む」は頬が腫れて痛いといふのではなく、流行性感冒などの爲めに頬の腫れる病氣を云つた一つの名詞で、それを病むといふ意である。

蕭條と吹く風を先づ木枯と大景的に叙し去り、その中に、頬の腫れる病氣にかゝり惱める人を點出したので、これまた下に「かな」とあるべきものゝ省略に屬する。いづれ實感であらう。

葛の葉のあもて也。けりけさの霜

(雜談集)

葛の葉のあもて見せ。けり今朝の霜

(篇突)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」には元祿四年説としてあるが、四年二月出版の「雜談集」にあるから三年と見るべきものであらう。

葛の葉は、風に吹かれて屢葉裏を見せるので、「枕草子」にも「葛の風に吹きかへされて裏のいと白く見ゆるおかし」とある。

(一) 今朝の霜に、葛の葉の白きは常に見する葉裏ならで、その葉表なりけり、と詠歎したのであり。
(二) 今朝の霜に、葛の葉の、いつも見する葉裏ならで、白き葉裏を見せけり、といふのである。
共にたゞ、葛の葉の廣葉に霜が白く置いたといふ畫的境致ばかりでなく、枕草子などの連想から「也けり」「見せけり」と口を衝いて出るので、それらの豫備智識のないものには、この連想は持てないの
で、勢ひ畫的の方がかりを見つめる、さうしてこれらの句を反て技巧と云ひ爲すのは過りである。

雑水に琵琶きく軒の霰かな

(有磯海)

「芭蕉句選年考」には「元祿二三の冬は湖南にあり、此頃の吟にや」とあり、晋風氏の「芭蕉句集定本」には元祿三年とし、「新編芭蕉一代集」發句の部には元祿四年説とし、書翰部には「芭蕉翁眞蹟拾遺」の霜月廿二日附、祐子宛の書翰

(前畧) 過し頃より兩足いたみ遠方へは出不申候。唯近き在廻りばかりに暮居候。次第〱に寒つよく成候故、わらぶきの軒にて丸雪の音を聞て「雑水に琵琶きく軒のあられ哉」此一句申進候。其表の御連中へ其元より御傳可給候、さて〱、手もふるひ見くるしき書面御免。以上。
をあげて元祿三年としてゐる。自分は此書翰の内様から湖畔の吟であらうと想像して、其三年説を採る。

ひとり寂しく雑炊を食してゐる、折からはら〱と霰が降つて來た、それを琵琶の音ときく、軒の霰かな、と詠歎したので、現實の琵琶の音と霰とを交錯して聞いたのではない。

三十里尾張大根のはなしかな

(芭蕉袖日記)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿三年作とするにしたがふ。「一葉集」の消息の部に、宛名なしの六日附
尾の露川方より宮重もらひ申候。今夕御出候て御料理なされべく候。此旨文章へも御つたへ可被下

元祿三年

五八三

候、「三十里尾張大根のはなしかな」「落葉してぬかみそ桶もなかりけり」味噌は御持參可被成候、以上。

といふ書翰がある。この内容から推測して無名庵に居つた頃とみる。(四年「秋の色」の句参照)
宮重大根は名物で、その附近三十里到るところ尾張大根の話かな、と宮重大根の美味を賞揚して、だから今夜はそれを煮てゆるく物語らうと誘引したのである。

落葉してぬかみそ桶もなかりけり

(芭蕉袖日記)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿三年作とするにしたがふ。前の句と同じ消息中にある。(四年「秋の色」の句参照)
我宿はあたりの木の葉もことごとくふるひ盡し、且つまた貧厨には糠味噌桶もなかりけり、と佗びた生活を云つたのである。

大津にて

三尺の山も嵐の木の葉かな

(己が光)

「己が光」は元祿五年の出版であるが、晋風氏の「新編芭蕉一代集」には元祿三年説としてあるのでそれにしたがふ。

こゝもかしこも、三尺ほどの小山にも、はらくと散りて吹かるゝ、嵐の木の葉かな、と實景そのまゝを詠歎したのである。

古き代をしのびて

霜の後撫子さける火桶哉

(勸進帳)

元祿四年の「勸進帳」にある。火桶に瞿麥の花を蒔繪にすることは、東福門院の御好みに起因したとか云はれて、古圖には屢撫子の繪のある火桶を見かける。また「霜さゆる朝の原の冬かれにひと」と

咲ける大和なでしこ、定家」の歌などを憶ひ寄せての作である。
撫子は晩秋まで咲いてゐる、しかし霜がふればさすがに花は見られない。その霜の降りし後に於て、
撫子の花が蒔繪になつて咲ける火桶かな、と即ち古き時代の火桶に就ての詠歎である。

住つかぬ旅のこゝろや置火燵

(猿 糞)

元祿四年の「勸進帳」に路通は

一日曲水を訪ひ、役にも立たぬ事ども言ひあがりて、心細くなりゆきしに、膳所の文とて持ち來れり、とくとく披き見るに、

いねいねと人に言はれても尙ほ食ひあらず旅のやどり、どこやら寒き居心を佗びて「住みつかぬ旅の心や置火燵」まだ埋火の消えやらす、臘月の末京都を退出で、乙州が新宅に春を待ちて「人に家を買はせて我は年忘」三日口を閉ちて題正月四日「大津繪の筆のはじめは何佛」金平が分別の如く今年は休みに致し候て歳且思ひよらず候へば如此御坐候、正月五日、曲水様、はせを。

と芭蕉の書翰をあげてゐる。

置火燵は移動し得るだけに、とこか爐にしつらへた火燵のやうに落ついた氣分に乏しい、そこがいかにも旅中の身の落付のないのに似通つてゐる。そこで、置火燵に我も亦住つかぬ旅の心やナア、と詠歎したのであるが、芭蕉は行く先々で歓迎されこそすれ、決して「去ね去ね」などと云ふ人はなかつた、端書のそれは即ち文章のあやである。

旅行

はつ雪や聖小僧の笈の色

(勸進帳)

「ひじり小僧」とは高野聖と云つて、笈を負ふて諸國を勸進修業するものゝことであるが、「高野聖に宿かすな娘とられて云々」といふ俚諺がある位だから、なかには道心堅固ならざるものもあつたらしい。それはとにかく、旅中に初雪がちらちらとふり出した、折からこれも旅から旅をつゞける高野聖が笈を負ひなしてやつて來た、其笈の色が特に目をひく、といふのである。

湖水眺望

比良みかみ雪指しわたせ鷺の橋

(翁草)

四年十月江戸に下つたので、晉風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄三年説とあるにしたがふ。比良嶽は滋賀郡、三上山は野州郡にあつて、琵琶湖を中に相對してゐる。

折しも雪がふつてゐる、そこで鵲の橋が七夕の二星を媒ちする如くに、鷺の橋が二つの山をさしわたして、この雪に一段の光景を添加せよ、といふので、或は實際湖上を幾羽かの鷺の飛び過るのを見たのに因つたのかも知れない。

洛より歸る道すがら、湖邊のけしきを諷ふ。

湖水より光り出しけり比良の雪

(許六詠草)

湖水から光り出しけり比良の雪

(一葉集)

「幽蘭集」「一葉集」にもあるが、晉風氏の「新編芭蕉一代集」に、土居剛吉郎氏所藏の許六の詠草「浪にまぶれて鮎とる人、丈草」歌よめと友がこしたる文ときて、許六の三物をのせて、元禄七年作とし、俳句の部には元禄六年前としてゐる。芭蕉は四年十月一二日頃近江を去つて江戸に下つたので、此句はこの以前でなければならぬ、然るに許六の芭蕉と初めて會つたのは、五年八月であるから、それ以後芭蕉が湖水の雪を見る機會はなかつた。故に自分は發句は元禄二三年湖畔住のころのもので、五年八月以後に於て其舊作に臨をつけたものと見る。

比良の山の雪を被つたのに、日のひかりがさしてきら／＼と、あだかも琵琶の湖水から光り出した如くに見られる、それを「光り出しけり」と斷定した主觀の句である。

か。く。れ。けり師走の海のかいつぶり

(新花鳥)

の。が。れ。けり師走の海のかいつぶり

(蓮の實)

元祿四年の「新花鳥」にある。また「己が光」に

住捨てし幻住庵にはいかなる句をかのかされけん、それはそれ、さて世の中をうけたまはるに「化
なから狐貧しき師走哉」其角

として次に此句があり、「蓮の實」には「草津にて」と前書がある。

此句を現代的に解すれば、歳晩の琵琶湖に鳩が沈んだ、即ち寫生の句であるとする、しかし元祿の句
はさう淡く見るべきものではない。「師走の湖」は歳晩に於ける琵琶湖ではなく、歳晩そのものを湖と
云つたのであり、「かいつぶり」も亦現實の鳥ではなく、歳晩といふ湖上に於ける芭蕉自身をさしてゐ
るのである。即ち年の暮といふ湖では、何やかやと世の波がはけしい、だから鳩たる我は其波を避け
隠れてしまった、といふのである。かく見て初めて其角の句も、鳩なる師はかくられたが、狐なる
自分は全力をつくして化けながら貧しい師走かな、と云つた句意が對照されて生きて來るのである。

果の朔日の朝から

節季候の來れば風雅も師走哉

(勸進帳)

節季候の來ては風雅も師走哉
節季候の來れば風雅の師走哉

(芭蕉句選)

(三冊子)

元祿四年の「勸進帳」にある。「三冊子」に

此句「風雅も師走哉」と俗とひとつに云侍る。云々
とある。

十二月の朔日の朝から節季候が來た、この節季候が來れば、いよ／＼今年も此月かぎりだと世人の心
を慌しからしめる、否世間のみではなく、我等の俳界にも亦、春や秋とはちがつた氣分がたゞよつて
來る師走なるかな、と詠歎したのである。

から 鮭も 空也の 瘦も 寒の内
(猿 糞)

元祿四年の「猿糞」にある。「芭蕉翁眞蹟拾遺」にあつて、今伊勢の山田秋雨氏の所藏にかゝる眞蹟に

「鉢たゝきのうた」と題して

霜の夕にねをそへて、うかれ友鳥行さきは、たのしき國のつれつれに、かほる茶の花目ざまし、夢にひとつまわれ、いざひとつ、南無あみだく、此曉のひとこゑに、ふゆの夜さへもなく千鳥、いざさかむ、南無阿彌陀く。からさけも空也の瘦も寒の内

とある。また「三冊子」に

この句、師の曰、心の味を云とらんと數日はらわたをしぼると也。ほね折たる句と見え侍る也。とある。

鉢叩の歌は彼の徒が瓢をたゝきながら唱ふるもので、内容はすべて無常觀を主とし、一章毎に南無阿彌陀くで結んである、それに擬してこの鉢叩の歌を作つたので、謂はゞ俳諧鉢叩歌である。

乾鮭も冬の寒い風に吹かれていよいよ乾からび、十一月中旬から夜毎に洛中洛外の墓所をめぐるか空也の徒も寒に入つて瘦せる、我もまた病弱で寒には瘦仲間の一入で、即ちかれらも我も瘦せる寒の内かな、と詠歎した省略法即ち十九字心切の格である。

これや世の煤にそまらぬ古合子
これや世の煤にそまらぬ古格子

(勸進帳)

(泊船集)

元祿四年の「勸進帳」に路通は此句に

つくしのかたにまかりし比、頭陀に入し五器一具、難波津の旅亭に捨てしを破らず、七とせの後、湖上の粟津迄送りければ、是をさへ過しかたをおもひ出して哀なりしまゝに、翁へ此事物語し侍りければ、

と記して居り、「泊船集」には「對門人ノ僧」と前書がある、また「一葉集」の前書

行脚の五器一具浪花に残し置きたるを、年経て路通が送りけるを、

とあるのは、「勸進帳」の路通の記事を見誤つたもので、五器は路通が七年前大阪の宿屋に捨てて來たのを、粟津の路通宛に送り越した事を、芭蕉に告げたら、芭蕉が此句をよんだ、といふので、芭蕉の五器ではない。「五器」は正しくは「食器」と書く、即ち食事用具の意で、又「合子」「格子」いづれもあて字で「盒子」が正しく、これ亦「食器」のうちであるが、ここでは専ら雲水僧の携帯する五ヶ一

組の食器の内の椀である。

七年も前に捨てて来た古五器を、大阪からはるはる江州迄送り返して来たのは奇特な事である、これやまことに世上の煤や塵に汚されぬ古盒子ナラン、と其古五器によりて送り越した人の誠意を賞したのである。

乙州が新宅にて

人に家をかはせて我は年忘

(猿 糞)

元祿四年の「猿糞」にある。また同年の「勸進帳」に曲水宛の書翰がある(住つかぬ旅の心や置火燵)の條参照。

我自ら購ふの煩ひなく、人に家を買はせ、そこに乗り込んで、我はまことに年忘をしたやうなのん氣な心もちである、といふので、年忘と云つても現今の忘年會のやうに酔つばらふことではなく、何の拘束もないことそれが芭蕉の年忘である。

御靈別當景桃丸興行

半日は神を友にやとし忘

(物の親)

元祿三年京都上御靈社の別當景桃丸方で年忘の連句を興行した。「雪に土民の供物納る、示石」水光る芦のふけ原鶴啼て、凡兆」以下、去來、景桃、乙州、史邦、玄哉、好春で、歌仙がある。

上御靈社は鞍馬口にあつて、早良親王、伊豫親王、藤原吉子、文屋宮田麿、橘逸勢、藤原廣嗣、吉備眞備、菅原道眞を祀る、

主人が神官であり、祭神は神とは云ふものの、世に在る時は文學を事とした方々もあるので、今日かく年忘れの俳諧をするが、半日は齊き祀る文學方面の神々を友にやするナラン、と挨拶をのべたのである。

元祿四年 辛未 (四十八歳)

三日口を閉て、題四日、

大津繪の筆のはじめは、何佛

(勸進帳)

大津繪の筆のはじめや、何佛

(蓮の實)

元祿四年の「勸進帳」蓮の實」にある。「勸進帳」には此句を載せた書翰がある(三年の「住つかぬ旅の心や置火燵」の條参照)。「蓮の實」には「正月四日を題す」、「瓜作」には「正月三日都に出るとして」「小文庫」には「鳩の海邊に年をこえて三日嘴を氷す」と各端書がある。元祿四年近江栗津の無名庵に春を迎へ、三日までは一句もなく、四日に初めて此句を得たのである。

大津繪は人も知る如く近江大津で行旅の人にひさいだもので、三尊佛、鬼の念佛、鷹匠、藤娘、辨慶、鯨其他くさくの戯れ繪であるが、最初は信仰的の三尊佛などに起因したものであらう。

此端書を、正月三日の間は佛の事を云ふのを忌むので四日まで詠まなかつたとか、或は又試筆は目出度い物を選むもの故佛を専らにする大津繪はそもく何佛を描くか、と重々しく解するのは餘り拘泥し過ぎて理屈になる。要するに此句は、三日まで一句も出來ず、四日に到つて、大津繪の試筆は何佛を畫くのか、と近い栗津に住んでゐたのでふと思ひつき、軽く疑つたものと解すべきである。

一とせに一度つまると、菜づなかな

(勸進帳)

「芭蕉句選年考」に正月十一日附、吟水宛の

一昨日は爲御慶御出被下候所、膳所迄用事に參候て不得御意残念不少存候。彌御無事にて御越年の由珍重存候。此方も春へ移り申候。扱發句の事被仰置候。さのみ宜しくも無之句に候へ共仰に任せ申入候。「一とせに一度つまると、齊かな」如此御座候。猶暇になり候は、詳しく可承候。返すく御隙に候は、又々入來待參らせ候。以上。

といふ書翰がある、これによつて湖畔迎春の元祿四年の作と見る。「三冊子」に

此句その春の文通に聞え待る。その後直にたつね侍れば、師の曰、其頃はよく思ひ侍るが、あまりよからず、うち捨しと也。

とある
他の菜類の隨時食膳に供せらるゝものと違つて、一年にたゞ一度七草の一として摘まるゝ齊かな、と詠歎したのである。「あまりよからず打ちすてしなり」と自身で云つてゐることから推測すると、或は實社會に貢献することなき自身を齊に托してゐるのかも知れない。

雪間より薄紫の芽獨活哉

(翁草)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。

鹿の子斑の雪解畑に、ちらりと薄むらさきの尖を見せてゐる芽獨活なるかなと詠歎したのである。

衰や齒に喰あてし海苔の砂

(己が光)

嚙當る身のおとろへや海苔の砂

(西の雲)

「西の雲」は元祿四年版、「己が光」は同五年版であるか、此句は同じと見るべきもので、晋風氏の「新編芭蕉一代集」に前句をあげて五年説としてゐるのは、其再案の年をさしたのであらうが、四年に置く方が穩かであると思ふ。

初案後句は今は海苔の砂を嚙あてるほどの身のおとろへやナア、と、再案前句は、今は海苔の砂を齒に食ひあてしおとろへやナア、と共に我が老境に入つたのを歎息したのである。

錢乙州東武行

梅若葉まゝりの宿のとろゝ汁

(猿糞)

元祿四年の「猿糞」及び「勸進帳」にある。「猿糞」に「笠あたらしき春の曙、乙州」雲雀なく小田に土持比なれや、珍碩」以下、素男、智月、凡兆、去來、正秀、半殘、土芳、閑風、猿雖、嵐蘭、史邦

野水、羽紅の歌仙がある、又「勸進帳」にも歌仙があるが、それには半殘以下八名が、探志、其角、路通、曲水、里東、芹花、素葉、寒水、落荷、飛陰の十名に變つてゐる。晋風氏は二卷を比較して、上二十句は近江京都の作者であるが、以下十六句が伊賀、尾張、江戸其他の地方の作者であること、二卷の相違するのは即ち其十六句であることによつて、二十句まで進んだところで、一卷は芭蕉が伊賀に送つて其他の人々につがしめ、一卷は乙州が自ら江戸に携へ來つて稿をついだものとしてゐる、肯綮にあたつてゐる説と思ふ。「三冊子」に

この句、師の曰、たくみにて云へる句にあらず、ふと云てよろしと跡にてしりたる句也。かくのごとくの句は、又せんとは云ひがたしと也。東武におもむく人に對しての吟也。梅若菜と興じて、ま

り子の宿にはといひはなして當たる一躰なり。

とある、芭蕉自身も天籟の作として心中に許してゐたことがうかゞはれる。時は今春風飜蕩の候で、足下が江戸に下るにあたつて過ぎ行く東海道は、山に海に風景のすぐれた地で、特に梅は籬落に清香をはなち、若菜は路傍に青々の色を示し、鞠子の宿のころ、汁は名物と云はれ、何れも足下の旅情を慰むるであらう、といふのである。

意識して工んだのではなくとも、梅の嗅覺、若菜の視覺、とその雅なるものから、一轉してとろゝ汁の味覺をひき出したあたり、又更に音調の滑らかなる、たしかに自賛に値する句である。

山里は萬歳おそし梅の花 (笈日記)

「蕉翁全傳」に

同じく四未の年四月始、大津より伊賀に來り、薪の頃奈良に行。伊賀に歸り、三月末また大津に在冬まで爰かしく歴覽。霜月はじめ栗津より東武に歸庵(桃隣同行)神の旅寢の吟此時なり。今年橋木子の會に、

として此句がある、即正月伊賀に於ての吟である。

こゝの軒端、かしくの畑隅に、梅はすでに盛りであるが、この山里は萬歳の來るのが遅い、といふ山村の情趣である。

正月卓袋月待に

月まぢや梅かたげ行く小山伏

(蕉翁全傳)

「蕉翁全傳」元祿四年の條にある、前句参照。

卓袋の宅で月待の講があつて芭蕉もまねかれて行つた、折から門邊を、小山伏が梅の折枝を打ちかたげて行く、といふ矚目吟である。

田家に有て

麥めしにやつるゝ戀か猫の妻

(猿 養)

麥めしにやつるゝ頃か猫の戀

(鋪 鑑)

麥めしにやつるゝ戀や猫の妻

(芭蕉句選)

元祿四年の「猿養」にある。「芭蕉全傳」によれば春は伊賀に滞在して居つたから、そこでの吟であら

う。

或は、麥飯が戀しい爲めにやつれてゐる、と解した人もあるが、いくら百姓家の猫でも麥飯に戀こがれてやつれることはあるまい、また麥飯に戀するのでは季感がない。

田家の牡猫の瘦せてゐるのを見て、この猫は麥飯ばかり食つてゐるので、かうはやつるゝ戀かと詠歎したのである。同じ詠歎でも「や」よりは「か」の方が少しく度が強い。「猫の戀」と一般的であるよりは「猫の妻」と或る一つを特定した方がよい。

闇の夜や巢をまどはして鳴く千鳥

(猿 養)

元祿四年の「猿養」にある。此句は「芭蕉句選」には、千鳥は水鳥といふ見地からか冬の部に收め、「一葉集」には、水鳥の巢は夏といふ見地からか夏の部に收めてある、然るに芭蕉が眼を通した「猿養」には、たゞの鳥の巢の見地からか春の部にある。千鳥は涉禽で水禽ではないが、産卵期に就ては智識がない、故に「猿養」にしたがつて春の部に置く。

夜は眞闇である、その中に折々千鳥の鳴く音が聞えるが、あれはわが棲みか人を人に知られぬやうに、あちらの方にまたこちらの方にと、まどはし鳴く千鳥だと思つたのである。

雀子と聲鳴かはす鼠の巢 (韻塞)

天井裏の鼠の巢では鼠が晝間からチュウ／＼と鳴いて、軒先の雀の巢では孵化した雀子が、餌をこゝんで来る親雀を待ちつゝチュウ／＼と鳴くのと、交々鳴いてゐる、といふのである。

八九間空で雨降る柳かな (續猿蓑)

元祿七年選の「續猿蓑」に「春のからすの鳥ほる聲、沾圃」初荷とる馬子も好の羽織着て、馬寛「昨日から日和かたまる月の色、里圃」四吟の歌仙がある。「花はさくら」には端書が

春の雨いと静に降て、やがて晴れたる頃、近きあたりなる柳見に行けるに、春光きよらかなる中に

も、したゞりいまだをやみなければ。

とある。支考の「臬日記」七月十二日の條に

素行曰、此句は其装ひは知りぬ、落所確かならずと。西華坊曰、此句に物語あり。去來曰、われも有。坊曰、われ先づ有り、木曾塚の舊草に有りて、或人此句を問て曰。見難し、此柳は白壁のの蔵の間の檜皮ぶきのそりより、片枝うたれてさし出でたるが、八九間も空に廣がりて、春雨の降る降らぬ氣色ならん、と申したれば、翁は障子のあなたより此方を見おこして、さるや大佛のあたりにて斯る柳を見置きたり、と申されしか。續猿蓑に「春の鳥の鳥ほる聲」といふ脇にて、春雨の降る降らぬ景色とはなして定めたる也。去來曰、我は其秋の事なる可し、我別墅におはして、此青柳の句三有り、何れかましたらんと有りしを、八九間の柳、さる風情は何處にか待りしか、と申したれば、そは大佛のあたりならずや。實にと申す。翁そこなりとて笑ひ給へり。(下略)

とある。これによると近江、京都に在る頃即ち元祿三四年の作とせねばならぬ、然るに元祿三年夏秋より着手し、四年五月刊行の「猿蓑」に入らざりしことから推せば、勢ひ四年春の吟で、脇以下は江戸に於て五年以後興行のものとせざるを得ない。

八九間は、高さとも廣さとも解し得るが、先づ高さと見るのが妥當で、柳を高くの意である。即ち端書にもある通り、雨後の滴りのまだをやみもない高い柳が、其枝から雨を降らす如くに見えるのを詠歎したのである。

吹 度 に 蝶 の 居 な を る 柳 か な

(わたまし抄)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年前とあるにしたがふ。

風が吹くと柳がそれにつれてなびく、其度毎に蝶が止つては起ち、起つてはとまる柳かな、と詠歎したのである。

春 の 夜 は 櫻 に 明 て し ま ひ け り

(翁 草)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。

秋の夜は月を賞して夜を明かすことがある、その如く、花下に一刻千金と愛で惜みつゝある間に、春

の夜はいつしか櫻に明けてしまつた、といふのである。

三月廿三日萬平が別墅にて一折

年 々 や さ く ら を こ や す 花 の 塵

(蕉翁全傳)

「蕉翁全傳」元祿四年の條にある。伊賀での吟である。萬平は大坂屋次郎太夫と云つた。

春も闌に花は梢頭を去つて紅き雪と紛ひ、こゝにかしこに散りちる、そこでこれらの花の塵がかく散り敷いては、年々にや櫻の樹を肥すナラン、と想像したのである。若し此句を年々に花の塵が櫻を肥す、と解するものがあつたら、それは「年々に櫻肥すや花の塵」と讀み誤つた人である。

の み 明 て 花 生 に せ ん 二 升 樽

(芭蕉句選拾遺)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」には考證の部に年代不明となつてゐるが、「芭蕉句選拾遺」には

元祿四未、尾張の人の方より淡酒一樽、木曾のうと茶一種得られしをひろむると、門人集ての時也。
はいかい有。

と附記がある。

到來の酒樽を飲みあけて、あとは花活にせう、といふ即興である。

不性さやかき起されし春の雨
不性さやかき起さるる春の雨

(猿 養)

(枇杷園隨筆)

「蕉翁全傳」元祿四年の條に、端書が「赤坂の庵にて」とあり、「枇杷園隨筆」所收の二月廿二日附、
珍夕宛の書翰中に此句がある。これまた伊賀での吟である。晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿三年
とあるは誤りであらう。

「不性さ」は「懶さ」といふほどの意で、春の雨の朝他の人にかき起された、といふので、そのかき
起す人も其庵に同宿してゐたことが明かである、即ち、前夜俳友を泊めて更けるまで語り合ひ、翌朝

は春眠曉を覺えずといふ調子でぐつつり眠つてゐると、客の方が先に起き出して、サア先生お起きな
さい、今日は春雨です、とでも云はれた風情であらう。

山吹や笠にさすべき枝の形

(蕉翁全傳)

「蕉翁全傳」元祿四年の條にある、伊賀での吟である。

すつと垂れ下つて花を咲かせてゐるさまを見て、山吹はや笠にさすべき枝の形ナルラン、と想像した
ので、それを「なり」と決定し或は「かな」と詠歎するには「山吹は」「山吹の」何れかであらねばな
らぬのである。

畫 讚

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時

(猿 養)

どんな晝かわからぬが、句意は、山吹が咲いてゐる、宇治の製茶時で、到るところに茶を乾かす爲の焙爐が匂ふ時節であるといふので、山吹色の茶といふ其色ばかりでなく、どこかに鄙びた相通の感じがある。

うらやましうき世の北の山櫻

(北の山)

元祿五年の「北の山」にある。「陸奥千鳥」には端書が「加州白山奉納」とあり「浮世の北」には

これは芭蕉庵の叟、武の深川より、越の白根へ送り申されし奉納の句也。

とあるが、「花の故事」に

撰集大望の由、近國の發句取あつめ進候。殘生長途のつかれにや冬中一日として心よからず、しかし暖氣になり候へば、柳陰軒のかり寝に、北枝、秋の坊風流のあらそひなどおもひ出し、しきりに御ゆかしく、一山の花も最はやひらき候はんとさつし候。「うらやまし浮世の北の山櫻」「雪消え残る細根大根、句空」「人足の天窓かぞゆる春風に、去來」末略

といふ句空宛の書翰があるので、奉納の句ではなく、句空宛の其人の境地をよんだものであることは明かにされる。「浮世の北」の「武の深川より」とあるのによれば五年と見なければならぬが、「北の山」は五年四月十五日出版であり、また「北の山」所載の芭蕉、句空、去來三吟の半歌仙は、江戸で出来たとも、文音によるとも見られず、京都での興行にかゝるものと見るべきである、さすれば、半歌仙は四年の秋に句空が天津の庵を訪ねた時の興行で、更に遡つて此發句を三年或は四年の春をすることは決して武斷でないと思ふ。「芭蕉翁句集」の七年、「芭蕉句選年考」の五年は共に誤りで、晋風氏の「新編芭蕉一代集」の五年前とするは最も穩かである、しかして自分は同書書翰部に句空宛書翰を四年作としてあるのにしたがふ。

嘗て御訪ねした柳陰軒は、今や「一山の花も最はや開き候はん」と「しきりに御ゆかしく」、その浮世の北の山櫻を朝夕眼にするのがうらやましい、と曾遊から現状を推測しての風情を羨望したのである。

卯辰即ち東々南の方位にある柳陰軒を「浮世の北」と云つたのは、「北」に「そむく」の意があるので、浮世にそむいての意である。

洒落堂記

四方より花吹入てにほの波。
 四方より花吹入て鴉の海。
 四方より花吹入て湖の波。
 四方より花吹入て湖の海。

(白馬)
 (卯辰集)
 (今日の昔)
 (泊船集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」は文章の部に元禄三年とし俳句の部に元禄四年説とあるが、「芭蕉翁發句集」に元禄四年とするに従ふ。

洒落堂は濱田珍碩の堂號で、琵琶湖畔膳所にあり、鴉の海は即ち琵琶湖の別名である。「白馬集」に山は靜にして性をやしなひ、水はうごいて情を慰す。靜動二の間にしてすみかを得る者有、濱田氏珍夕といへり。目に佳境を盡し、口に風雅を唱へて獨りをすまし、塵をあらふが故に洒落堂といふ。門に戒幡を掛て、分別の門内に入事をゆるさずと書り。彼宗鑑が客におしゆるされ歌に一等くはへ

てをかし。且それ簡にして方丈なるもの二間、休、紹、二子の佗を次てしかも其のりを見ず。木を植、石をならべてかりのたはぶれとなす。抑おもの、浦は、勢多、唐崎を左右の袖のごとくし、海を抱て三上山に向ふ。海は琵琶のかたちに似たれば、松のひき波をしらぶ。ひえの山、比良の高根をなゝめに見て、音羽、石山を肩のあたりになむ置り。長柄の花を髪にかざして、鏡山は月をよそふ。淡粧濃沫の日々にかはれるがごとし。心匠の風雲も亦是に習ふ成べし。として此句がある。

此文にある勢多、唐崎、三上、比良、比叡、音羽、石山、長等、鏡山と、四方八方から落花を吹き入れてにほふ、このにはの海かな、と、「匂ふ」に「鴉」をかけた縁語により。十九字心切格の詠歎である。

行春を近江の人とをしみける (猿蓑)

元禄四年の「猿蓑」にある。「去來抄」に

元禄四年

先師曰、尙白が難に、近江は難波にも、行春は行年にもなるべしといへり、汝いかゞ聞侍るや。去來曰、尙白が難あたらす、湖水朦朧として春を惜むに便有べし。殊に今日の上に侍ると申。先師曰しかり、古人も此國に春を愛することをさく都にとらず。去來一言こゝろに徹す。行年を近江に居たまはゞ、いかでか此感のましまさん。行春難波にゐまさば、もとより此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事真なるかなと申。先師曰、汝はともに風雅をかたるべきものなりと、殊更よろこび給ひけり。

この文中の「古人も此國に春を愛することをさく都に劣らず」との芭蕉の詞が、此句の上部に省略されてゐるものと見るべきである。即ち、霞こめられたる湖水に對して、嘗ては古人も過ぎ行く春を惜んだことであらうが、今日ぞ我も亦行春を近江の人々と共に惜みける、といふのである。これをたゞ行春を近江の人と惜んだものと解するのは、「ける」も「けり」も漫然と見過すからで、「ける」と結んだのは、「ぞ」「なん」「や」「か」「が」の云起しに照應した結果であることを知らば、そこから遡つて「今日ぞ」を發見し得るのである。

京にても。京なつかしやほとゝぎす
京に居て。京なつかしやほとゝぎす

(己が光)

(幽蘭集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」俳句の部には元祿四年とし、書翰三年の部に、村松七九氏所藏の季夏廿日附、金澤の小春宛の

何處持參の芳翰落手御無事之旨珍重に存候。類火難御のがれ候よし、是又御仕合難申盡候。殘生いまだ漂泊やまず湖水のほとりに夏をいとひ候。猶どち風に身をまかすべき哉と秋立比を待かけ候。

(中略)「京にても京なつかしや時鳥」暑氣に痛候て及早筆候
といふ書翰がある。北校は元祿三年三月十七日に火災にかゝつたが、小春の類火が其時のものをさすならば、此狀は三年のものとするべきであるが、「湖水のほとりに夏をいとひ候」どち風に身をまかすべきやと秋立比を待かけ候」とあるのは、三年夏中石山の幻住庵に住んだ事、及び其秋は猿蓑選に關係し、且つは九月湖畔の無名庵に入った事と適合しない、かく見來る時に、小春の類火といふのは北校

の火災とは別で、元祿四年であつたものとせざるを得なくなる、故に晋風氏の四年説といふ方に従ふ「幽蘭集」には「旅寓」と端書がある。

都の夜空にほととぎすを聞かばやと、かね／＼なつしく思つてゐたが、それが今京に旅寝して、其音を聞けば猶京がなつかしやナア、と詠歎したので、多く事は期待に反するものだが、都の時鳥は、現實に面しても猶なつかしみを覚える、といふのである。

うきふしや竹の子となる人の果

(嵯峨日記)

「嵯峨日記」は元祿四年四月十八日嵯峨の去來が落柿舎に入り、五月四日まで十七日間滞在中の日記である。

十九日、午半、臨川寺に詣、大井川前に流て、嵐山右に高く、松の尾里につゞけり。虚空藏に詣る人往かひ多し、松尾の竹の中に小督屋敷と云有、都て上下の嵯峨に三所有、いづれか慥ならむ。彼仲國が駒をとめたる處とて、駒留の橋と云此あたりに侍れば、暫是によるべきにや。墓は三間屋の

隣、藪の内にあり。しるしに櫻を植たり。かしこくも錦繡綾羅の上に起臥して、終藪中の塵あくたとなれり。昭君村の柳、普女廟の花の昔もおもひやらる。

として此句と次の句がある。

小督は、高倉院の寵姫で、清盛が己の女たる中宮の寵の衰へんことを恐れて、これを除かんとするを聞き、ひそかに宮中を脱し去つて嵯峨にかくれた。帝は源の仲國に命じて其所在を探らしめられ、仲國たま／＼嵯峨の茅舎に琴の音を聞き、尋ねあてゝ再び宮中に伴ひ歸つたが、清盛の怒り更に甚しく、遂に迫つて剃髪せしめた。ために小督は世をはかなんで、大堰川の水屑となつてしまつた。此事は平家物語の有名な一章である。

人世行路難の意の「うきふし」を、竹の節にかけていふことは、古くからのしきたりで、此句に於ても、嘗ては綾羅錦繡の衾に主上に添ひまつた身が、後には大堰の水屑となり、今や筍の生ふる此の藪の中に、空しく一基の石に其名のみを残す、其人生の果てを思へば、げに行路難やナア、と嗟歎したのである。

嵐 山 藪 の 茂 り や 風 の 筋

(嵯峨日記)

「嵯峨日記」十九日の條に前の句に並んである。更に斜日に及んで落柿舎に歸る。凡兆京より來、去來京に歸る。宵より伏と附記がある。

花に名ある嵐山も、今は新緑の候とて、たゞ見るかぎり緑の帳を張つたやうである。ふと見ると、或る一部の藪の茂みあたりが、殊につよい風に吹かれる如くに若葉がなびいてゐる。そこで、あの藪の茂りのあたりがや風筋ナラシ、と想像したのである。

柚 の 花 や 昔 し の ば ん 料 理 の 間

(嵯峨日記)

柚 の 花 に む か し を 忍 ぶ 料 理 の 間

(小文庫)

柚 の 花 に む か し 忍 ば ん 料 理 の 間

(芭蕉翁發句集)

「嵯峨日記」十九日の條

落柿舎は昔のあるじの作れるまゝにして、處々頽破ス、中々に作みがゝれたる昔のさまより、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ、彫せし梁、畫ル壁も風に破れ、雨にぬれて、奇石怪松も葎の下にかくれたるに、竹縁の前に柚の木一もと、花芳しければ。

として、此句と次の句が並んでゐる。昔の面影はなく住み古りて、竹縁のほとりに一本の柚がこまかな白い花をみせてゐる。この家の昔のあるじの頃は、料理の間ではくさくさの割烹のあしらひに、或はこの花柚も摘まれたこともあるだらうと、今はたゞ在りし昔をしのばん、といふのである。

「柚の花に」では、初めからそれを考慮に入れたことになつて、「柚の花や」の初めはたゞ柚の花を見つげ、それから想の働いて來るものに比べて、時間の推移が表れてゐないので、一籌を輸する。

ほ と ぎ す 大 竹 藪 を も る 月 夜。

(嵯峨日記)

ほ と ぎ す 大 竹 藪 を も る 月 ぞ。

(小文庫)

ほととぎす大竹原を漏る月夜

六二〇

(笈日記)

「嵯峨日記」二十日の條に前句に並んである。

嵯峨附近は實に見事な竹林が多く、いかにも大竹原の感じがする。「竹藪」といふと「竹原」より幾分小さく感じるが、それは自分だけのことであらうか、千里の藪などいふ詞もあるから一般には「竹原」も「竹藪」も同じであるのかも知れない。

子規が一聲鳴いて過ぎ、月のひかりが僅に大竹藪を漏る月夜かな、と詠歎した「かな」省略の法である。「月ぞ」といふと、月そのもののみは強くなるが、大景の上からは「月夜」の方が、反て一句の總ての字句に均勢をもたしめ得る長所がある。

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

(嵯峨日記)

「嵯峨日記」二十二日の條に

朝の間雨降。けふは人もなく、さびしきまゝにむだ書してあそぶ。其ことは

喪に居る者は悲をあるじとし、酒を飲むものは樂をあるじとす。さびしきなくばうからまし。と西上人のよみ侍るは、さびしさをあるじなるべし。又よめる、「山里には又誰をよぶこ鳥、獨守まむともひしものを」獨住ほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふと。素堂此言葉を常にあはれむ。予も又「うき我をさびしがらせよ閑古鳥」とはあつる寺に獨居て云し句なりとある。

人或は悲みをあるじとし、或は樂しみをあるじとし、まださびしさをあるじとする。我もまた西行上人の如く獨居のさびしさをあるじとするものである。閑古鳥よ、時々來り鳴いて、うき我を更にさびしがらせよ、といふので、此場合「さびしがらせよ」は即ち悦ばしめよの意になるのである。

手。を。う。て。ば。木。魂。に。明。る。夏。の。月。
夏。の。夜。や。木。魂。に。明。る。下。駄。の。音。

(嵯峨日記)

(同)

「嵯峨日記」廿三日の條にある。原本には「夏の夜」が初稿で、それを消して、右傍に「手を打てば」と改作を記してあつて、芭蕉の意では後句は捨てたのであるが、版本にはすべて二句併出してある。第二は、夏の夜が下駄の音の響に明くる、といふのではなく、夏の夜はや下駄の音の響に明くるナラシ、と想像したのであるが、其想像格たるところが意にみたなかつたので捨て去つたのであらう。第一は即ち再案で、夏の月と先づ自然現象を表し、手を打てはその響に夜が明ける、と云ふので時間の推移を示してゐる。

二句共に物音の響が聞ゆると思ふ間もなく、曉け早き夏の夜は白らむといふのであるが、手を打つも下駄の音も、共にたゞ突然と頭に上つたのではなからう。惟ふに、この句は廿三日の條下にあるのから、廿三夜待の月を拜む人たちの下駄の音、拍手の音などが、落柿舎の垣外にでも聞えたのではなからうか。

竹の子や稚き時の繪のすさみ

(嵯峨日記)

「嵯峨日記」廿三日の條に前句に並んである。

竹の名所の嵯峨は、竹の子時とて處々にそれが見得られたであらう、それで、我も昔稚きころは、いたづら書きにかいたものであつた、と幼時を追想したのである。

一。日。く。麥。あ。か。ら。み。て。啼。雲。雀
 麥。の。穂。や。泪。に。染。て。啼。雲。雀

(嵯峨日記)

(同)

「嵯峨日記」廿三日の條に前句に並んである。原本には、「麥の穂」が初案で、それを消して、右傍に「一日く」の改作を記してあるのは、後句は捨てた意であるが、版本にはすべて二句併出してある。

第二は、麥の穂をや泪に染めて鳴く雲雀ナラン、と想像の格であるが、二十三四歳の舊作「岩つゞじ染る涙や時鳥」の句あることを思ひ出して抹消したのであらう。

第一は再案で、一日／＼と日にまし麥が熱れ色を見せてゆき、そして空高く鳴く雲雀かな、と「かな」省略法による詠歎である。

能なしの寝たし我を行々子

(嵯峨日記)

「嵯峨日記」廿三日の條に前句に並んである。

何をしなければならぬといふ責任をもたぬ能なしの身はあゝねむい、行々子よ、盛んに鳴いて、我をこの睡魔の手からのがれしめよ、といふので、「寝たし」で一齣を完了し、第二齣は未尾の「のがれしめよ」が省略されてある、即ち二段切の格である。もし此句を「ねむたき我」とすれば「ねむたき」はたゞ「我」を説明するにとゞまつて、此句の「ねむたし」によつてしみ／＼ねむい狀を表す如き効果は得られない、これが二段切にすべき正格の構想で、現代人の句の無意識に二段切になるのとは全然違ふのである。

五月雨や色紙へぎたる壁の跡
五月雨や色紙まくれし壁の跡

(嵯峨日記)

(笈日記)

「嵯峨日記」最終五月四日の條に

宵に寝ざりける草臥に終日臥。晝より雨降止ム。

明日は落柿舎を出んと名残をしかりければ、奥口の間／＼を見廻りて、

として此句がある。また「芭蕉句選年考」に

洛の何某去來が別墅は下嵯峨の藪の中にして、嵐山のふもと、大井川の流に近し。此地閑寂の便りありて心すむべき處なり。彼去來物くさきおのこにて、窓前草高く、數株の柿の木枝さしおほひ、五月雨漏盡して疊障子かびくさく、打伏處もいと不自由なり。日かげこそかへりてあるじのもてなしとぞなれりける。

といふ文の後に此句がある。

四月十八日から十七日間起臥してゐた落柿舎をいよく立ち去らんとする前日の吟で、さすがに名残

惜しく、一間／＼を今更らしく見廻つた、外は五月雨がしと／＼と降つて居り、とある一間の壁には色紙をへがした跡がある、といふので、情景兼ね備つてゐる。

ほととぎす啼や五尺の菖草 (葛の松原)

元禄五年の「葛の松原」にある。晋風氏の「新編芭蕉一代集」には五年説としてあるが、書翰部には元禄年中として「蕉影餘韻」所載の五月十日附、左水宛の

今日京へ人遣し候に付ちよと申入候。其後は御還々敷候。彌御無爲御入候哉、此許愚身無事居申候。然は此本之通に急々出来候哉、文庫やへ御あつらへ可給候。烏丸大坂や方にたのみ入候。其許郭公の句いかゞ候哉うけ給度候。此方にて勝て出来不申候、漸々此句いたし候「ほととぎす啼や五尺のあやめ草」(以下略)

これによれば、近江栗津での吟らしく思はれ、隨て三年か四年でなければならぬ、よつてしばらく四年の部に置くことにする。

「伊達衣」には端書が「寄夏草」とあり、「三冊子」には

此句は「ほととぎすなくや五月のあやめ草」といふ歌の意をとりての句なるべし。

とあり、「栗津原」には「ほととぎす啼くやさつきのあやめ草あやめわかぬ戀をするかな」五月の月を引きかへて「時鳥鳴くや五尺のあやめ草」一字轉變の句也。五月の空時鳥天に満ち、菖蒲地に満ちたる景容能くとり合せたる句とて、季吟師にも感じめされけると也。

とあり、また「連歌至寶抄」に

發句の仕立はすら／＼と、たとはゞ五尺のあやめに水を注ぎたるにひとしく仕立たるがよし。

とある。その連想を、「あやめわかぬ」の歌の一齣を假り來り、たゞ一字「月」を「尺」に變じ、即ち換骨奪胎の作である。

解釋は前掲「栗津原」のその如く、地には五尺の菖蒲がす／＼とのび、天には時鳥が鳴くやナアと五月の頃のすが／＼しい氣分を詠歎したのである。

粽結ふかた手にはさむ額髪 (猿 糞)

元祿四年の「猿蓑」にある、然るに「猿蓑」は五月の出版であるから、夏季の句は其以前の作と見るが相当であるが、「三冊子」に

此句、去來集撰の時、物語の躰と也。先師の方より云送られしは、物がたりの姿も一集にはあるべきものとて送ると也。

とある、即ち此句は五月の季に入つてから詠んだのではなく「猿蓑」に入れる爲めに、春の頃作つたのである。

艶麗な乙女が粽を作つてゐると、おくれ毛が二筋三筋額にかゝつて来る、それを片手でちよつと掻き上げる、といふので、支考が「古今抄」に評して「菱川が色繪をつくし」といふ如く、全く師宣筆としてありさうな繪畫的、魅惑的な句である。

畫竹自讃

ふらずとも竹植る日は蓑と笠

(末若葉)

ふらずとも竹植る日や蓑と笠

(木 枯)

「笈日記」大垣部に「畫讀、竹、木因亭」とあり、更に「是は五月の節をいへるにや、いと珍し」とあり、「水の友」には、「正秀亭にて竹青堂の稱號を祝し」とあり、晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とあるのは、四年の冬江戸へ下向の途次、大垣に立寄つて畫いたものと見てのことであらう。案ずるに、前に竹青堂の號を賀する爲めによんだ句を、冬大垣で竹を畫いた時再び用ひたのであらう「晋書」に

五月十三日を竹酔日とす、また竹迷日とも云ふ。是日竹を栽うれば必ず活く。とある、それからとつて「竹植日」と俳諧の李語になつたのである。

陰曆五月十三日は梅雨の季節である、故に其時降らずとも、いつ降つて来るかも知れぬから、蓑と笠の用意はすると、いふのである。

水。無。月。は。ふ。く。病。や。み。の。暑。さ。か。な

(芭蕉句選拾遺)

晝は猶腹痛やみの暑さかな

(瓜作)

「句選拾遺」に元祿四年とあり。晋風氏の「新編芭蕉一代集」には考證を要するものとしてある。「ふく病」は黄胖病で、身體にむくみの來る病である。

前のは、陰曆六月は黄胖病患者にひし／＼と感ずる暑さなるかな、と詠歎したものである。後のは、夜でも苦しいのに、晝は猶一層黄胖病患者には感ずる暑さなるかな、と詠歎したのである。どちらにしてもあまり感服されぬ句である。

本間丹野が家の舞臺にて

ひらくとあがる扇や雲の峯

(桃 砥)

ひらくとあがる扇や雲の峯

(笈日記)

「笈日記」湖南部には前書が「本間氏主馬が亭にまねがれしに、太夫が家名を稱して吟草二句」として

此句と次の「蓮の香」の句をあけて居り、「泊船集」には「大津丹野亭」とあり、「金蘭集」には「元祿四ひつち卯月連衆八人」とあり、「ひらひらとあがる扇や雲の峰」「青葉ほちつく夕立の朝、安世」「瀬を落す舟を名残に見送りて、支考」空芽、吐龍、丹野、葉文と七人で、一人の名は不明である。空の雲の峰の如く、ひらくと高くあがる扇やナア、と主人の技倆を稱揚し、名聲の發展を祝した挨拶の句である。

蓮の香に目をかよはすや面の鼻

(笈日記)

蓮の香や目より潛りて面の鼻

(翁 草)

「笈日記」には前句と共にあり、「翁草」には端書が「丹野が仕舞の教談に」とある。芳香が能面つけし太夫の鼻をつくので、その蓮の香の來る方に目をかよはすやナア、と詠歎したのである。「目より潛りて」は不自然で解釋に苦しむ。

井狩昨卜亭に遊て

世の夏や湖水をたむ波の上
世の夏や湖水にうかぶ浪の上

(雪の流)

(芭蕉發發句集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。「一葉集」には端書が「井狩氏水樓」とある。

此家は水にのぞみ直ちに湖の上に在るが如くで、その激澗たる小波に、蓋し世上の夏はや湖水をたむナラン、と涼味を賞したのである。

丈山之像調

風かをる羽織は襟もつくりはす
風かをる羽織や襟もつくりはす

(小文庫)

(芭蕉句選)

「芭蕉翁發發句集」に元祿四年とす。石川丈山の像に題しての吟である。

前句は、かれ丈山の像を見ると、いかにも碩儒の風貌が嚴乎として、其着せる羽織は襟もかいつくろはずして、そこに薫風に對する感がある、といふので、「かをる」で切れる。

後句は、襟もかいつくろはずして、そこに風のかをるが如き感ある羽織やナア、と詠歎したので、「や」で切れる。

別ればや笠手に提て夏羽織

(白馬)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」の元祿四年説とするにしたがふ。

「笠」といふ觀念も、「羽織」といふ觀念も、この時代と現代では全然ちがつてゐるのである。この頃では笠は現代に於ける帽子とも見るべく、男子の外出には、素頭か笠をかぶるか二途でありとすれば、夏である故暑さをしのぐために、必ず笠を被つてゐることが判る。羽織は現代では禮服とされてゐるが、古くは現代の外套と同じ性質のものである。かく見來れば此句中の人物は、現代ならば即ち

夏外套を着て、帽子を手にし、今將に辭し去らばやとするとところである。

辨慶は夏もかみこの羽織かな
(蕉翁消息集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年とするにしたがふ。「蕉翁消息集」にある宛名なしの

石清水瀧本坊法印の許へ、ある在家よりなた大豆一籠おくりければ、其返事に「辨慶が七道具のなた豆は日本一のかうのものかな」さて／＼おもしろき狂歌、中々及かたき事に思ひ侍る、しかし我も一句をせんと、狂歌の心をもちて「辨慶は夏もかみこの羽織かな」これ精一はいにて候。むかしの人の口には叶ひがたく候。かしこ。

といふ書翰がある。

辨慶は七つ道具とて用心深く幾つもの武器を背負てゐる、それほどだから夏でも猶冬に着べき紙子羽織かな、と無論辨慶時代に羽織などいふものはないが、それを假用して、武器のみならずすべてに用心ぶかいことを詠歎したのである。

此宿は水雞もしらぬ扉かな
(笈日記)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。「笈日記」湖南部に「同じ津なりける湖仙亭に行て」とある、大津での吟である。

この宿はいかにも物静かで、俗人は勿論のこと、水雞ですらも叩くことを知らぬ扉なるかな、と歎絶したのである。

己が火を木々の螢や花の宿
(己が光)

元祿五年の「己が光」の序に

漕のく船のあと見ゆるまでといへるは、花多して實すくなしとや、されば俳諧もことば粧ふのみにて、其ひとすじにいづる事かたしとは、蕉翁の云へるものなり。このことは鏡肝石心にこたへて、

日々にこれをおもふ。折から、勢田石山の螢さかりなりけると魚荷に告しをうれしくも、卯の花のさらに咲ころ、槐之道をさそひ、夜ふねのつなもあけやすう、宇治越にかゝりて、彼里の茶屋のわびしきやどり。さど波やけふも火ともすくれまちと、そこのけしきをうち興しけるに、膳所の吟友たれかれを先としてきたり、互に人をおどろさんと、方寸をくるしめしに、此宿にも翁の吟行残されしとて、持出るを、おのゝ眉をならべかしらをつき付て、味ひ侍るに、實も深長なることを覺ふ。さるから此句を上にて、その夜のたはぶれをならべ、己が光とは名付侍りぬ。元祿五壬申夏日。車庸。

とある、これに由つて此句を四年の作と見る。

木々に群る、あの螢はや、己が光りを花の宿とするならん、との想像を、錯綜叙法によつたものである。

酔て寝んなでしこ咲る石の上 (葉集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」には貞享四年説とあるが、「芭蕉句選拾遺」の元祿四年とするにしたがふ。木立の蔭などにところゝ大きな石があり、そのあたりに川原撫子が可憐な花を見せてゐる、いかにも涼しげである。酔ふてその石の上に一眠りせん、といふのである。

正成之像、鏡肝石心此人之情

なでしこにかゝる泪や楠の露 (小文庫)

「芭蕉翁發句集」に元祿四年とす。

「撫子」は草の花であり、兼ねてまた愛兒正行の意でもある。「楠の露」は正成が胸中の萬斛の感で、楠木の露のはらゝと撫子にかゝる泪やナア、と詠歎したのである。楠公が正行に遺訓する圖であらう。

水無月や鯛はあれども鹽くじら (葛の松原)

元祿四年

六三七

晋風氏の「新編芭蕉一代集」發句の部には元祿五年説とし、書翰の部には四年として、大橋新太郎氏所蔵の六月廿一日附、ケ來宛の

追て申入候、水無月のほ句如此に候。「水無月や鯛はあれども鹽鯨」右之句にて御坐候。外にはおぼへ不申候。おもしろからず候へ共、どうも〜いたし様無御座候に付、去人の所へ行候へば、亭主鹽くじらを料理し居候あと故、其節かくいたし互に笑ひ申事に候。又々よろしき句出候は追て可申入候。取紛れ早々如此に候。以上。

といふ書翰を載せてある。「葛の松原」は五年五月十五日の脱稿であるから、水無月の句は其前の作なることは明かである、即ち晋風氏の「新編芭蕉一代集」書翰部の元祿四年とする方がよいと信ずる。

「葛の松原」に 支考は

みな月のしほ鹽といふものは、清少納言もえしらざりけむ、いとめづらし。風情の動ざるところはみづからしり、みづから悟るの道ならむかし。と云つてある。

盛暑六月の候にあたつては、鯛はあるけれども、それよりも鹽鯨の珍味なるには如かず、といふのである。

初秋や疊ながらの蚊屋の夜着

(西の雲)

元祿五年の「西の雲」にあるので四年の作と見る。

いつやら初秋になつた、或る夜寝につかうとすると、少し冷氣を感じる、さりとてわざ／＼夜着を取り出すまでのことでもなし、幸ひ蚊は大分少くなつたから、今夜はこの疊んだまゝの蚊屋の夜着で即ち蚊屋をかけて寝よう、といふ佗人の境涯である。

盆 過 て 宵 開 く ら し 虫 の 聲

(小文庫)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。

虫は競つて秋の譜を奏でる、それに心ひかれてふと見やれば、盆の月や燈籠で明るかつた後とて、二十日の宵闇が、平常の月のそれよりは一層闇い、といふのである。

ある智識ののたまはく、なま禪大疵のもとひとかや、いとありがたく覺て

稻妻にさとりぬ人のたふとさよ

(己が光)

元祿五年の「己が光」にある。

野狐禪は如露亦如電など、とかく一閃の稻妻に無常感を結びつけたがるが、そんな事には全然無關心で、何の氣もつかずにゐる人の方が、遙かに尊としよ、と禮讚詠歎したので、即ち或禪師の云はれた「生禪大疵の基」に裏書したのである。

粟津にて

稻妻や海の面をひらめかす

(芭蕉翁發句集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」考證の部に元祿四年説とするにしたがふ。

稻妻がひらめくのではない、稻妻がや海の面をひらめかすナラン、と想像しつゝ閃々たる湖上の稻妻を見やつたのである。

野水が旅行を送りて

見送りのうしろや寂し秋の風

(三つの顔)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説としてある、四年には冬になつて尾張を過ぎたのだから、其時の吟ではない、或は野水が江州へ來たのを送つたのか、とにかく晋風氏の説にしたがつて置く。

「三つの顔」に野水の「來る春までと柳ちる陰」といふ脇がある。

「見送りの後」といふ語は、どうしても見送らるゝ人には云はれず、見送りする方即ち芭蕉自身であ

る。また「寂し」を形容詞即ち「さびしい」と見ては、「うしろやさびしい」となつて語を爲さぬ、其場合は「うしろがさびし」でなければならぬ。故に「寂し」は「さび」「さぶ」と活用する動詞と、助動詞「き」の第二終止格「し」の併合で、口語の「さびた」の意と見なければならず、さうなれば「やは勢ひ疑問の云起でなければならなくなる。

故に此句は、秋の末に、送られて發つてゆく野水の後ろ姿は或る寂びをもつてゐる、それにつけても見送る我がうしろ姿もまたかれ野水の如く寂びしか、と、日ならず湖南の地をあとに東に下らんとする自己を想像してみたのである。

秋。風。の。ふ。け。ど。も。青。し。栗。の。い。が
初。嵐。吹。け。ど。も。青。し。栗。の。い。が
(木 枯)
(小文庫)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ「三冊子」に

此句、「い」の青をおかして句にしたる也。吹ども青しと云ふ所にて、句とはなして置たりと也。

とある。

風はいつしか秋めいても、栗の穂はまだ青々しい といふので籬落の即興である。

座 右 之 銘

物 い へ ば 唇 寒 し 秋 の 風 (小文庫)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ「本朝文選」に

人の短をいふ事なかれ、己が長をとく事なかれ、銘に云「ものいへばくちびるさむし秋の風」

とある。此句は、其目的がすでに訓誡にあるのだから、秋風の俳句としての價値は問題ではない。道學者流がこれを以て人を訓ふるのはいが、これを俳句の眞髓なるが如くに云ふのは、元來彼等に文學を味はふ力がないのだから許さねばならぬが、苟くも俳句にたづさはりながら、これらの句を文學上の第一位にあるものとするのやからは、よろしく三十棒を食はすべきである。それと同時に、此句あるによつて、芭蕉の文學觀を疑ふのは、此句の成因を無視して、芭蕉を誣ふるものである。要す

るに俳句型の教訓語が此句の目的なのである。

牛 部 屋 に 蚊 の 聲 よ は し 秋 の 風
牛 部 屋 に 蚊 の 聲 聞 き 残 暑 か な

(小文庫)

(芭蕉翁發句集)

「芭蕉句選年考」に歌仙の一座連名により元祿四年とするにしたがふ。

「星合集」に「牛部屋に蚊の聲よはし秋の風、芭蕉」下樋の上に葡萄かさなる、路通「酒しぼる雫ながらに月暮て、史邦」以下、文章、去來、野童、正秀、の歌仙がある。又「三冊子」に

此句、「蚊の聲よはし秋の風」と聞へし也。後直りて自筆に「殘暑哉」とあり。とあつて、初案と再案の順序がわかる。

「秋の風」には「蚊の聲弱し」がよく、「蚊の聲聞き」には「殘暑」の方が適當である。芭蕉の性格には前の方がふさはしく、後の方はむしろ蕪村を思はせる、蕪村の「古井戸や蚊に飛ぶ魚の音聞き」は此句の換骨奪胎と見てもよからう。

十 五 夜

米 くる、友 を 今 宵 の 月 の 客

(笈日記)

「笈日記」に支考は

是もむかしの秋なりけるが、今年は月の本するを見侍らんとて、待宵は楚江亭にあそび、十五夜は木そ塚にあつまる。いざよひは船浮て、さど汲やかた田にかへるとよめる、その浦の月をなん見侍りける。路通がまつ宵に月をさだむる文あり、支考が名月の泛湖の賦あり。阿叟は十六夜の辨をかきて、竹内氏の所にとむ。此三夜を月の本末と名つけて、成秀、楚江が二亭に侍り。文しければ爰にしるさず。

として、此句及び「やすくと」十六夜や「鎖あけて」の句がある。

此文によると、十四日は路通、十五日は支考、十六日は芭蕉が其記事を書いたことになる。然るに支考編の「和漢文操」には月見賦と題して、芭蕉の文があつて、「笈日記」の記事とは違ふ。それらの爲

めに月見賦は芭蕉の名を假托した支考の作だといふ説もある、自分も「笈日記」の記事により、また月見賦の文勢から云つて、芭蕉に非ずして支考なりと斷する。しかし「和漢文操」には明かに芭蕉となつて居り、且つ句は芭蕉の作に相違ないから、とにかく参考として掲げる。

ことし琵琶湖上の月見むとて、しばらく木曾寺に旅寝して、膳所松本の人々を催すに、乙州は酒をたづさへて、泉川に三日の名をつたへ、正秀は茶をつゝみて、信樂に一夜の夢をさます。今宵は茶といひ酒といひ、かたふの人も二派にわかれて、酒堂は灯にかたぶきて、其茶に玉川が歌を詠じ文章は月にうそぶきて、其酒に樂天が詩を吟す。支考は若く、木導は老いぬ。智月は物のおぼつかなく、かつぎのあまのなま浮びならず。それが中にも惟然法師は、酒におどろき茶に感じ、ほむるもそしるもそらに風吹て、爰に三子者の志をためざらんや。まして其外の友とする人も、峨々洋々の心ざしをしれれば、すべては飲中八仙のあそびならん。誠や、つれづれの法師だに、心をつくるはぬ友えらびば、かゝる月見の佗なるやと、思ひしまゝの草の庵に、浮世の外の風狂をつくせり。「米くるゝ友をこよひの月の客」かくて三盃の興に乗じて、湖水の月に船を浮べんと、物このむ人の風情をそへるたるに、杖瓢箪の唐子はなけれども、扇に茶瓶の若男あれば、赤壁の船のとぼしさに

あらざめり。さゞ渡や打出の濱の名にしあふ、鏡の山もこなたにさしむかひ、日枝は横川の杉にっらなりて、比良の高ねは雁をもかぞへつべし。うしろに音羽の峰たかく、石山の鐘はあはづの嵐にさえて、そこに楓橋の霜も置ぬらん。矢橋の歸帆は今宵をもてなすに似たるべし。「名月や湖水に浮ぶ七小町」されば我朝の紫式部は、石山に源氏のおもかけを寫し、唐國の蘇居士は、西湖に越女のよそほひをたとふ。いづれも風雅の名にのこりて、今のまぼろしに浮ざらんや、實そも和漢の名蹟なりけらし。さて松本に舟をさしよせて、茶店の欄干に心をはなてば、月はよし蓬萊の水をへだてず身はたゞ芙蓉の露にうるほふ。竹林の酒も時ならで、松が江の鱸はこよひなるをや。猶はたかたぶく月の名残には、幸崎の松もひとりやたてる。古き都の名もゆかしければ、尾花川の明ぼのをこそと、千那尙白をおどろかしぬれば、夜ははや五更に過ぬべし。「三井寺の門たゝかばや今日の月」誠に推敲のむかしながら、船にこよひの遊をおもへば、此座に韓愈が文章をもあざむき、賈嶋が詩賦をももどきぬべき詩人文客にとぼしからねば、たとへ赤壁の前後といふとも、その地に此人をはづべきやと、見ぬもろこしを相手として、今宵の風流をあらそふほどに、月は長等山の木の間に入りぬ。

粟津の庵に棲む芭蕉の生活は、深川に於ける四山瓢は座右になくも、やはり日常の糧食は誰彼が持つて来てくれた、即ち今宵の乙州は酒を、正秀は茶といふ様に。それで我は米くるゝ友即ち何のへだて心のない人々を、今宵觀月の客に招じて、共に清光を賞する、といふのである。

名月や兒たち並ぶ堂の縁 (初 蟬)

「初蟬」に、風國は

翁義仲寺にのみませし時に「名月や兒達並ぶ堂の縁」とありけれど、此句意にみたとて「名月や海にむかへば七小町」と吟じて、是も尙あらためんとて「明月や座にうつくしき顔もなし」といふに其夜の句は定まりぬ。

と云つて居り、「三冊子」にも同様の記事がある。

天には、望の夜の清光が皓々としてかゝり、地には、大寺の堂の縁にちこたちが何人か並んでゐる、といふので、いかにも清浄な気分である。其夜の句は定まりぬ」といふところの「座に美しき顔もな

し」はむしろ此句より見劣りがするのは現代人たる自分のみの見であらうか。

名月や海にむかへば七小町 (初 蟬)
名月や湖水にうかぶ七小町 (和漢文操)

前々句「米くるゝ」及び前句「名月や兒達」の下を参照を要す。

「七小町」とは、小野小町の生涯の、榮枯盛衰の變化が多かつた事をいふのである。

名月は皎々として空中にかゝつてゐる、湖にむかへば 激澗たる小波に月光が反射して、きら／＼と光り、其變化のさまが、あだかもかの七小町の如くはげしく見らるゝといふのである。

以上は一般の所解であるが、自分は此句に就て根本から全く違つた解を下したく思つてゐる、しかしそれには「和漢文操」の句が邪魔になり、さりとてそれを抹殺し去るべき反證を持たぬで、残念ながら先づ一般に従つて前解をあげて置き、更に一私見として、「七小町」とは小町の生涯を云ふのでなく淨瑠璃の曲目なり、といふことを提唱する。それは種彦の「柳亭筆記」に

又山本角太夫（上方土佐といふ）が淨瑠璃「七小町」といふさうしに、ちいさき船をつくり、色紙を帆に掛けて、小町が雨乞をする事あり（下略）

「近代因果物語」（前略）元祿十一年の頃迄、日暮小太夫といふ者あり、美濃尾張國々をめぐり、説經をかたり、辻打の芝居に傀儡を舞して、渡世しける。それより世くだり人さかしくなりて、如何なる國のはて、ひなの長路の口ずさびにも、あいごの若などいふふるびたる事はいはず、只わつさりとはやり歌角太夫節こそよけれど、行くもかへるも耳をとらへて顔をかたづけ、七小町杉山兵衛などいふ物をしほりあけ、又は上方へのぼり、（下略）

とある。これで元祿頃に、角太夫節の淨瑠璃「七小町」を語つて、美濃尾張邊を巡行する日暮小太夫といふ者があり、それが上方へも影響を及ぼしたことがわかる。故に、名月の夜、湖水にむかつて清光を賞しつゝあると、どこかで、これも月を賞する人とはみらるゝが、俳諧のともがらとは全く異つて、流行の「七小町」をうたつてゐる、と自分は解するのである。かく解すれば「兒達ならぶ」座に美しき」と三句の内容に脉絡があることになる。たゞ「和漢文操」のものは此解釋を許さぬ、或は支考が「七小町」を湖面の風景に對する主觀と誤解して、いたづらを加へたのではあるまいか。

明。月。や。座。に。う。つ。く。し。き。貌。も。な。し。
月。見。す。る。座。に。う。つ。く。し。き。顔。も。な。し

（初 蟬）

（夕顔の歌）

前の「七小町」及び前々の「兒たち」の句、必ず参照を要す。

「夕顔の歌」には「古寺翫月」と端書があり、また尙白の「庭の柿の葉みの虫になれ」といふ脇があつて、兩吟の歌仙がある。晋風氏の「新編芭蕉一代集」には此歌仙を元祿三年とし、「明月や」を元祿四年としてあるが、上五「明月や」と「月見する」との差はあつても、同一吟であることは明かであり、又三年八月はまだ義仲寺に移らぬので、「古寺翫月」の端書は四年にして初めて意義を爲すものである、故に此句は元祿四年八月十五日に義仲寺に於ての吟と見る。「一葉集」に十八日附の加生宛の書翰があり、それには「月見する」と「川風や薄柿着たる」の句があるが、「川風や」は四年五月出版の「卯辰集」にあつて、三年の作たることが明かであるから、其書簡は信ずるに足らぬものである。

花見ならば今様の美人、當世の才子も居ようが、月見する座にはそれらのうつくしき顔がない、とい

ふのである。「明月や」の方では、月は明らかに天空に懸つてゐる、その清光の下に在つては、何物もこれと美を競ふべきものもなし、とも解し得られるが、先づ第一解の方が正しいと信ずる。

於 大津義仲庵

三井寺の門たゝかばや今日の月

(雑談集)

「米くるゝ」の句下にある月見賦参照。

月見賦の末に「韓愈が文章をもあざむき、賈嶋が詩賦をももどきぬべき云々」とあるが、それは、賈嶋が受験の爲め都に上り、或日驢上に詩を案じて、鳥宿池邊樹、僧敲月下門の句を得た、初めは推にしようかと思ひ、再び敲にせんかと迷つて、驢上にこれを吟じ、或は手を以て推すそぶり、敲くまねをして行くうちに、京兆尹たる韓愈の行列に衝きあたつた、韓愈はこれを聞いて、それは敲に決定すべきだと云つた、それ以來字句を洗練することを推敲といふ。その詩中に僧は敲く月下の門といふ句があるが、我は今宵それとは反對に、月下三井寺の僧房の扉を敲かばや、と清遊の興盡きざる意をの

べたのである。

鎖明て月さし入れよ浮御堂

(薦獅子)

「米くるゝ」の句の條下に、支考の「阿叟は十六夜の辨をかきて」と云つてゐる十六夜辨は、「本朝文鑑」と「小文庫」とにあるが、少しく違つてゐる、こゝには「小文庫」の方をあげる。

望月の殘興なをやまず、二三子いさめて舟を堅田の浦にはす。其日申の時ばかりに、何某茂兵衛成秀といふ人の家のうしろにいたる。醉翁狂客月にうかれて來れりと聲々によばふ。主思ひかけずおどろきよろこびて、簾をまき塵を拂ふ。園中に芋ありさゝげ有、鯉鮒の切目たゞさぬこそいと興なりけれど、岸上に蕙をのべて宴をもよほす。月は待つほどもなくさし出、湖上花やかにてらす。かねてきく、仲の秋の望の日、月浮見掌にさしむかふを鏡山といふとかや。今宵しも猶そのあたり遠からじと、彼堂上の欄干によつて、三上水莖の岡南北に別れ、その間にしてみね引はへ、小山巔をまじゆ。とかくいふ程に、月三竿にして黒雲の中にかくる。いづれが鏡山といふ事をわかず。主のい

はく、折々、雲のかゝること、客をもてなす心いと切なり。やがて月、雲外にはなれ出て、金風銀波千體佛のひかりに映ズ。かのかたぶく月のおしきのみかはと、京極黄門の歎息のことばをとり、十六夜の空を世の中にかけて、無常の觀のたよりとなすも、此堂にあそびてこそ、ふたゝび惠心の僧都の衣もうるほすなれといへば、あるじまた云、輿に乗じて來れる客を、など興さめて歸さむやと、もとの岸上に盃を揚て、月は横川にいたらむとす。「鎖明けて月さし入れよ浮御堂」安々と出「いざよふ月の雲」

此句は受命者が省略されて居り、それをいかに見るかによつて二様に解し得る。

(一解) 人々よ、浮見堂の鎖を開けて、月光を隈なく堂内にさし入れよ、と人に對して希望するもの。

(二解) 雲よ、其扉の鎖を開けて、浮御堂に隈なき月光をさし入れよ、と雲に對して希望するもの。而して自分はその第二解を探るものである。

やすくと出ていざよふ月の雲。

(笈日記)

やすくと出ていざよふ月見哉。

(木 枯)

前の「鎖あけて」の句と同時の吟である。「舟をならべて置渡す露、成秀」ひらめきて咲も揃はぬ萩の葉に、路通」以下、丈草、支考、貉睡、正則、楚江、勝重、葦香、鬼脊、成房、重吉、重氏、柴菜、柳沅、絃五、の歌仙がある。晋風氏によれば、此歌仙を載せた「堅田集」卷末に「元祿四年辛未仲秋」とあるといふことで、それによつて三夜さの月見が四年なることが決定される。

「いざよふ」は「猶豫」ためらふ「徘徊」等の意があつて、十六日の月は十五日より若干後れるので「いざよひ月」といふのであるが、この句では「徘徊」の方の意で、即ち「月斗牛の間を徘徊す」などのそれにあたる。「月も三竿にして黒雲のうちにかくれ」とある如く、初めはやすくと出た月が、やがて雲の間に徘徊する、といふのである。「月見かな」は誤りである。

十六夜や海老煮るほどの宵の間

(笈日記)

十六夜や海老煎るほどの宵の間

(芭蕉翁發句集)

「笈日記」によつて此句もまた同夜の作たることが知られる。「煎」は「いる」「にる」兩様によむので「煮」と同じである。「ほど」は空間的にも時間的にも見られるが、こゝでは時間の方である。十六夜や、と先づ其日を云ひ、さらに、今宵は小海老を煮るほどの、極めて短い間の宵闇なり、といふので、云起も助動詞も共に省略の格である。

名月はふたつ過ても瀬田の月

(西の雲)

名月はふたつ有ても瀬田の月

(芭蕉句選)

名月はふたつ有ても瀬田の橋

(一葉集)

元祿四年は八月閏であつた。「西の雲」に支考の

元祿のことしは秋も三十日に重りて、名月の興も更なり、歌人詩僧もいとまなく、萩露萩風になやまされて、奇を好み怪を好む、これらは人の世の道なるにや。吾ともがら風羅翁に随ひて、山色水光の月を見盡して、人々手をたすけ腰をおして、又石山に詣でぬ。此夕閏八月十八日なり(以下略)

といふ文がある。

今年は閏で、十五夜の名月が二度あつた、其二つの名月を過ぎても猶まだ、こゝに今宵賞すべき瀬田の月がある、と其清光を賞揚したので、「過」と「有」はほど同じだが「瀬田の橋」では其夜の月を揚げるものとして不備である、誤記であらう。

柴の庵ときけばいやしき名なれども世にこのもしき

物にぞありける。此歌は東山に住ける僧を尋て、西

行のよませ給ふよし、山家集にのせられたり、いか

なる住居にやと先その坊なつかしければ。

柴の戸の月や其まゝあみだ坊

(小文庫)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。「一葉集」には端書が前掲のものに續いて「或る僧庵の坊につかはし侍る」とある。即ち「小文庫」の端書では、西行が訪ねた庵の懐古であ

り、「一葉集」の端書では、或る坊に送つたといふ現實である。自分は現實とする「一葉集」を探る。昔西行は、東山に住める僧を訪ねて、歌をよんだが、今我は、それと同じやうな庵に住む僧の人をなつかしんで、此句をよむ、といふ端書で、句意は、柴の戸を照らす淨光をや其まゝに、阿彌陀如来と拜む阿彌陀坊ナラン、と專念西方阿彌陀如来に歸依安心するさまを云つたのである。

夜

九たび起ても月の七つ哉

(雜談集)

卷末に「元祿辛未歲内立春日、於狂而堂燈下書 芭蕉翁回國歸庵、時宜相應故、被校合畢」とある「雜談集」にあるので、四年の句たることが知られる。「一葉集」の端書

「旅窓の長夜」は何に由つたのか知らぬが適切である。昔の時計は、夏冬の日の長短にかゝはらず日出より日没までを六刻に、日没より日出までを六刻に、合せて一晝夜を十二刻に分ち、夜の子の刻九つとし、一時(現今の約二時間)毎に八つ、七つ、と數へて、日出を曉六つ卯の刻とし、巳

の刻の三つで終り。日の中心を午の刻九つとし、以下同じく數へて、日没を暮六つ酉の刻とする。故に夜の七つは大略午前四時にあたるが、それよりは日没から日出までの六分の五過ぎた時と見るのが正しいのである。

「九度」は九回の意ではなく、たゞ數度といふ意を下の七に對する爲めにさうしたので、即ち秋の夜の夢安からず、屢起きて空を眺めたが、まだ月のさまが午前四時ごろなるかな、といふのである。

後の名月石山にまうで、

橋桁のしのぶは月の名残哉

(己が光)

橋桁のしのぶは月の餘波哉

(名月集)

元祿五年の「己が光」にあるので四年の作と見る。

「名残」「餘波」はともに「なごり」とは讀むが、「名残」にはそれを惜む意がふくまれ、「餘波」にたゞ餘れる勢ひといふだけで、惜む意はない。たゞの月ならば、月の餘勢の「餘波」でもよいが、後の月

の意としては「名残」とする方が正しい。

橋桁の朽ちたところに、忍が二葉三葉晩秋の風にそよいでゐる、それがいかにも月の名残りの風情なるかな、と詠歎したのである。この忍は釣忍にする種類の方ではなく、俗に八つ目蘭といふ風蘭に似たものである。

むかしきけ秩父殿さへすまふとり

(小文庫)

「芭蕉翁發句集」に元祿四年とするにしたがふ。「芭蕉翁眞蹟拾遺」に十九日附、意水宛の書翰に申進じたき事は山々に候得共、此間は風氣に候故ふせり罷在候。ほ句之事もそこ／＼にして置候、近所の衆も寄集何角咄等も被致、夫にて風の神もなぐさみ居申候、仍而「むかし聞秩父殿さへ角力取」是も風氣故この風いたし候句御笑ひ草々以上。

とあり、「古今抄」に支考は「一座の談笑にして本より切字の論に及ばず」と云つてゐる。前掲の書翰に由つて、「一座談笑」とはうけがはれるが、「切字の論に及ばず」は大誤りで、支考や許六はよく理屈

はいふが、實は切字の事などは眞にわかつては居なかつたのである。

「秩父殿」は秩父庄司畠山重忠のことで、「古今著聞集」に、關東に強力の名を轟かした長居といふ角力取を心憎く思つて、取り拉いた事が載つてゐる。

いや風邪にやられて寝込みましたよ、ナニ弱いといふのか、ダガまあ昔のことを聞け、秩父殿でさへも角力取であつたさうだから、いくら強くても、時々寝たこともあらうヨ、と戯れたのである。

猿引は猿の小袖をきぬた哉

(猿舞師)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。

猿曳は我子の如くに愛する猿の爲めに、其着る物を砧にうつかな、と詠歎したので、「は」を重く見たり、小袖は仕立上つたもの故それを砧でうつことはないなど、詮議するといやになるが、それらは極めて軽く見るべきものであらう。

鷹の目もいまや暮ぬと啼鶉

六六二
(小文庫)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。

日はいつしか西に沈んでだん／＼と暗くなり、どこやらで鶉の音が聞える、あれは、鷹の目も今や見えぬまでに暮れねと、心を安んじて鳴く鶉なるかな、と詠歎の省略法である。

祖。父。親。の。さ。か。へ。や。柿。み。かん
祖。父。と。親。そ。の。子。の。庭。や。柿。み。かん

(駒さらへ)
(芭蕉句選拾遺)

「芭蕉句選拾遺」に「元祿四年、堅田柳瀬可休亭にてと有、中七孫のさかへやと有。」とある。

宅地の四邊には柿があり蜜柑があり、それが赤に黄に累々として秋の色を見せてゐる。そして此家は祖父も親も子も孫も皆健在で、げに榮えやナア、と詠歎したのである。

霧雨の空を芙蓉の天氣哉

(韻塞)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。

霧が濃やかで、雨のやうに物を潤ほすのを霧雨といふ、其霧雨のふる空をまあ、芙蓉の花の時を得顔の天氣なるかな、と詠歎したので、いづれ時間は朝の間である。

田家に宿して

稻こききの姥もめでたし菊の花

(笈日記)

「笈日記」彦根部元祿五年の條にある、然るに其四年の誤なることは、後出「尊かる涙」の下に詳出する、従てこれも四年とすべきものである。

菊の露は齡を延べるといふ。其菊が庭前に咲きみだれて芳香を放つて居るのも、老て猶すかやに稻を扱いてゐる姥も、共にめでたし、と其家を祝福したのである。

旅行

草の戸に。日暮てくれし菊の酒
草の戸や。日暮てくれし菊の酒

(きさらぎ)

(笈日記)

元禄五年の「如月」にあり、また「笈日記」四年の條に端書が、「おなじ年九月九日乙州が一樽をたづさへ來りけるに」とあつて、「蜘蛛手にのする水桶の月」といふ乙州の脇がある。

九月九日は重陽の佳儀とて菊花の觴を擧ぐる日である、しかしもとよりそんなまうけもしない我庵である、ところが夕方になつて、乙州が菊の酒だと云つて一樽をくれた、といふので、いざこれを酌んでゆる／＼語らばう、といふ餘意を含んでゐる。

見所のあれや野分の後の菊

(陸奥千鳥)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄四年説とするにしたがふ。

野分の後の菊こそ、愁じいに作りたてたる菊よりも、反つて見所あれや、と詠歎したのである。上部に「こそ」の省略あることを知らずに、命令の「あれや」と誤解し、或は「あれや」はたゞ漫然「あれや」と同じと見るが如きは不詮議である。

琴箱や古物棚の背戸の菊

(住吉物語)

「泊船集」には「此句去來の物語にて聞侍りぬ」と附記があり、「一葉集」には端書が「大門通を過るに」とある。「大門通」は江戸ならば、舊吉原の大門通にあたるところの、今の日本橋長谷川町と富澤町の間の通をいふが、元禄四年なれば江戸での作とは見られない、去來から聞いたと云へば或は京都とも思はれるが、京都に「大門通」といふところがあるか何うか、此點決しがたいので、晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄四年説とするにしたがふ。

大門通を過ると或店頭に琴箱のあるのが目についた、ふと見やると、その古物店の背戸の菊が今見頃

である、といふだけであるが、琴と菊との二つから陶淵明などの事が、連想とまで意識せずとも、或は頭にひらめいたので、チョット心がひきつけられたのであらう。

片田何某が亭にて

蝶も来て酢を吸ふ菊のすあへ哉

(篇 突)

蝶も来て酢を吸ふ菊の膾かな

(一葉集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。「一葉集」には端書が、

堅田の何がし木既醫師の兄の亭に招れしに、みづから茶をたて酒をもてなされける。野菜八珍の中菊花なますいと芳しければ、

とある。「酢和」も「なます」も同じ物であるが、上に「酢」の字があるから、下は「なます」の方がよゝ。

亭主が手つから野菜料理をしてもてなされたが、その中で菊膾が一番うまかつた、それで我ばかりで

はなく、蝶も来て蜜ならぬ酢を吸ふ菊膾なるかな、と詠歎して謝意をのべたのである。

堅田詳瑞寺にて

朝茶のむ僧静也。菊の花

(ばせを鹽)

朝茶のむ僧静かさよ菊の花

(柿表紙)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。

寺の庭には菊の花が見事に咲いてゐる、それに對して悠然と朝の茶を吸る僧の風情が、見るからに靜かなり、といふのである。「靜かなり」は副詞「靜かに」と動詞「あり」の併合からなるもので、靜寂なる現在の状態を示す辭であり、「靜かさ」は靜寂の度を表す辭で、「靜かなり」に比して、智の量を幾分か含む。

入麩の下焼立る夜寒かな

(己が光)

―元祿四年―

元祿五年の「己が光」にあるので四年作と見る。「葛の松原」に「是は曲水亭にて夜寒といへる題の發句なり」とある、即課題吟である。

主婦が乳麵を茹でんとして、厨の方でこと／＼物音させながら、竈の下に火を焚いてゐる夜寒かなとの詠歎である。

東寺を過るに

荻の穂や頭をつかむ羅生門
蘆の穂や頭をつかむ羅生門

(芭蕉翁發句集)

(寛政版鹿嶋紀行)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」考證の部に四年説とするにしがふ。「羅生門」は渡邊綱が鬼の腕を切つたので有名な場所、其古蹟は東寺の近くにあたる。

こゝは羅生門のほとりである、昔鬼が渡邊綱の頭をつかんだやうに、今は荻の穂が我頭をつかむラン

と想像したのである。元祿時代に於ける東寺あたりは蘆荻が到る所にあつたことが推測される。

刈あとやものにまぎれぬ蕎麥の莖

(芭蕉句選拾遺)

前句と同じく「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。

蕎麥の莖は赤いので、刈跡もやまた他の物には紛れぬナラン、と想像したので、刈跡の物に紛れず、とは違ふのである。また蕎麥の莖が物に紛れずと見てしまふと、「刈跡や」が特に一齣としての獨立性をもたぬ。

露凍て筆に汲干す清水哉
凍とけて筆に汲干す清水哉

(みつのかほ)

(小文庫)

「みつのかほ」冬の部に

元祿四年

此句は尾陽昌圭のもとにてもせられけるを、何の集にやあらん「凍解て」とあやまりぬ。

と附記してあり、「小文庫」には「苔清水」と端書があり、吉野に於けるものらしく見えて、そこに矛盾がある。随て年代も「芭蕉翁發句集」には貞享五年(元祿元)とし、晋風氏は「芭蕉句集定本」には「露凍」をとりて元祿元年とし、「大系本芭蕉一代集」には「凍解」をとりて元祿元年とし、「新編芭蕉一代集」には「露凍」をとりて元祿六年説として居る。

更に足跡を辿れば、吉野の春は貞享五(元祿元)年で、「春雨の木下に傳ふ雫哉」の苔清水の吟があつて此句も同時と見なければならず。尾張の冬は貞享元年、四年、元祿四年であつて、何れの説に従つてよいか迷はざるを得ない。故に假に尾張に於ての作と見て置く、しかしそれにしても元祿六年の秋は在江戸であるので六年説は肯定出来ないから、やむを得ず元祿四年の部に編入して置き、更に研究もしてみたく、またひたすら識者の是正をまつ。

(露凍)とするものは「みつのかほ」熱田三歌仙。

露も凍てゝ、やがては涸るゝに近き水量であるから、筆に汲干すほどの清水なるかな、と詠歎したのである。

(凍解)とするものは「小文庫」「泊船集」「芭蕉句選」「芭蕉翁發句集」「一葉集」であるが、貞享四年の吉野路は三月中旬以後花の頃であるから、「凍解」が適切でない。

西行のとくくの清水に臨んで、山々の雪も消え、凍てし巖肌も解け初め、清水も僅かに滴つてゐるそれで我も亦嘗て西行がしたであらう如く、筆もて汲干す清水なるかな、と往時を連想しての詠歎である。

鬼燈は實も葉もからも紅葉哉 (小文庫)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。

背戸の垣が根あたり誰が蒔いたともなく鬼灯が三もと五もとあり、それが今は實も葉も殻までも紅葉なるかな、と詠歎したのである。

梧。う。ご。く。秋。の。終。り。や。葛。の。霜 (小文庫)

秋。風。や。桐。に。う。ご。い。で。葛。の。霜。

六七二
(泊船集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」の元祿四年説とするにしたがふ。「泊船集」には端書が「暮秋の景色を」とあり、「三冊子」には「秋風や」を擧げて

此句、「梧うごく秋の終りや葛の霜」と、はじめは聞侍る、後直りて此秋風也。とある。

(一)は、葛に霜が少しくかゝり、梧は黄に染まつた葉がうごく秋の終りやナア、と詠歎したのである。
(二)は、秋風がや、今は桐の葉にうごいて、やがて葛の霜となるらん、と想像したのである。

初。霜。や。菊。冷。初。る。腰。の。綿。

(荒小田)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年前とするにしたがふ。「荒小田」秋の部に「此句羽紅のもとよりこしわたつくりてをくられし返事也。」と舍羅の附記がある。

もう初霜が来た、着せ綿をかぶつて菊の冷え初る頃、我は贈られたこの腰綿に其冷えを凌ぐことが出来る、と謝意をのべたのである。

淋。し。さ。や。釘。に。か。け。た。る。き。り。く。す

(草庵集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年作とするにしたがふ。

釘に掛けたる籠に鳴く、きりくすの音のさびしさやナア、と活動の自由を奪はれた虫の音があはれを誘ふたのである。

庵にかけむとて、句空が書せる兼好の繪に

秋のいろぬかみそつばもなかりけり

(柞原)

元祿五年の「柞原」にあるので四年作と見る。「芭蕉翁消息集」に句空宛の

御手翰辱拜見、夜前は得閑談珍重不少候、明日御立可被成之旨、後刻貴面御相談可仕候。追付御入來是にて御ねころび可被成候。像讀之義發句珍らしからず難義仕候、ケ様の事にもかき付可申や「秋の色(庵の秋か)ぬかみそつぼもなかりけり」「しづかさやゑかゝる壁のきりくす」御用捨なく可被仰下候、同じくば御免、白紙に思ふ事書進上申度候。以上。

といふ書翰がある。これによると、兼好の讀を依頼されて、どちらがよいかと依頼者に問ふたのである。其結果は此句の方に定まつたので、後年句空が「柞原」を選んだ時とり入れたのであらう。「徒然草」に

たふとき聖のいひおきけることを書付て、一言芳談とかや名つけゝる草子を見侍りしに、心にあひて覺えし事ども、一、後を思はん者は構太瓶一も持まじき事なり、持經本尊にいたるまでよき物をもつ、よしなき事なり、

といふ文章がある。それに思ひ寄せて、秋の色即ち其庵は寂寥にして、糠みそ壺もなかりけり、と兼好の境涯を讚美したのである。

然るに此句は、三年の「落葉してぬかみそ桶もなかりけり」と同一構想たることは明かである。さす

れば句空から兼好の畫讚を依頼されて、昨年は自己の境地を詠んだ句を、今度は兼好の境致に轉じて應用したものと見るべきであらう。

しづかさやゑかゝる壁のきりくす

(芭蕉翁消息集)

前句に引用の消息文にある通り、前句と同時の元祿四年の作で、此方は兼好の讚として書かなかつたものである。

壁には繪がかゝつて居り、そこにきりくすが髭をふりながらとまつてゐる、げにしづかさやナア、と詠歎したのだが、これでは兼好の畫讚ではなく、むしろ依頼者句空其人の贊のやうである、だから句空はこれを捨て、前の「秋の色」を書いてもらつたのであらう。

たふとがる涙やそめてちる紅葉

(笈日記)

「笈日記」に

元祿五年神無月のはじめつかたならん、月の澤ときこえ侍る明照寺に羈旅の心を澄まして、とあるが、五年にはすでに深川に在つたことが明かであるから、五年は四年の誤りである。後出の「都出て」の句に引用の曲水宛書翰に「暮秋廿八日より三十二日めに深川に到る」とあるので、即ち此句は元祿四年十一月二日頃、江戸に下向の途次に、平田の光明遍照寺に李由を訪問しての吟である。「一夜静まるはり笠の露」と李由の脇がある。

次の句端書にある如く、明照寺は樹木も古りて殊勝に見え、其境は、ところ／＼に紅葉がそよ吹く風にもはら／＼とちる、それは、参詣の人々のこの御寺を尊がる涙がや染めて散る紅葉ナラン、と想像したのである。

宿明照寺。當寺此平田に地をうつされてより、己に

百年におよぶとかや、御堂奉賛の辭に曰、竹樹密に

土石老たり、と誠に木立物古りて、殊勝に覺え侍り

ければ。

百年の氣色を庭の落葉哉

(韻塞)

前の句と同じく元祿四年十月一二日ころの吟である。

此寺は移轉後己に百年に及ぶとか、當時ですらも奉讚の辭に、竹樹密に土石老たり、とあるが、いかさま現在でも、その百年前と同じ景色を眼前に見する、庭のこの落葉なるかな、と詠歎したのである。

矩外がもとに冬籠して

つくり木の庭をいさめる時雨かな

(芭蕉句選拾遺)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」考證の部に元祿四年説とするにしたがふ。「一葉集」には端書が「美野垂井宿矩外が許に冬籠して」とある。垂井は關が原と大垣の中ほどにある。「矩外」はどんな人かわからぬ。「作り木」は庭師の手入れをした樹木の意。「いさめる」は神いさめなどいふ如く、いさましめる意。

矩外亭の庭は庭師の手入の行届いた樹木が立ち並んでゐる。今日はその庭を勢ひつける時雨なるかなと詠歎したのである。

千川亭に遊て

折々に伊吹をみては。冬ごもり

(後の旅)

折くに伊吹を見てや。冬籠

(笈日記)

「芭蕉句選年考」には「後の旅」の記事に由つて元禄二年の吟としてゐるが、元禄二年冬は大垣には居らぬから、「後の旅」の記事は、其他の年のものも混じてゐると見るのが相當で、晉風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄四年説とするのは賛成である。

千川は宮崎荊口の次子で、岡田治左衛門といふ。その千川の宅からは伊吹山がよく見える、それで、此家のあるじは、折々伊吹山を見ては冬籠りをする、といふのである。後句はそれを、折々伊吹山を見てや冬籠りするナラン、と想像したことになつて、主観の加はるだけ遙かに活躍してゐる。

耕雪子別墅即時

凧に匂ひやつけし歸り花

(後の旅)

これまた前句と同じ時の吟である。

「匂」とあるから庭前に梅の歸り花でもあつたのだらう。その歸り花が木枯に匂ひをやつけしナランと想像したのであるが、矚目の歸花を應用して主じの風格を賞した挨拶の作である。

水仙や白き障子のとも移り

(笈日記)

「笈日記」に支考は

元禄三(四の誤)年の冬、神無月廿日ばかりならん、あつた梅人亭に宿して、塵寰の閑を思ひよせられけん、九衢齋といへる名を残して、

元禄四年

と記してあり、「敏宮物語」には

幻住庵を見捨、武陵に趣たまふ折、支考、桃林(隣)の二法師ともなひて、梅人子か許へおはして、
として此句があり、「炭の火ばかり冬の饗應、梅人」宵の月船を浅みに引揚て、支考」以下、湘水、辨
三、桃林、馬蹄、野幽、梧雨、越人、臨江の首尾行が一卷あつて、「笈日記」元祿三年とあるは「四」の
誤なることが明かである。

張りかへたばかりの眞白な障子の色の、相反映する白き水仙やナア、と詠歎し、梅人亭のすがくし
き氣分をのべての挨拶の吟である。

其にほひ桃より白し水仙花

(笈日記)

「笈日記」三河部に、支考は

新城はむかし阿叟の逍遙せし地也。なにがし白雪といふおのこ、風雅の子ふたりもち侍る。二人
ながらいとかしこくぞ侍る。阿叟もその少年の才をよみして、是を桃先、桃後と名づけ申されしを

支考も名の説かきてとよめける也。是は水仙の花を桃先桃後といへるより、かくはいへるなるべ
し。

とある。江戸下向の際、三河南設樂郡新城の太田白雪亭での吟で、「茶の冊子」に「土屋藁屋のならば
薄雪白雪」朝から嘴ならず鳥の來て、桃隣」以下、蘆雁、支考、以文、扇車、淡水、桃先、桃後、桃
鯉、雪丸、の歌仙が一卷ある。

水仙即ち二人の兄弟は、その風韻が、白桃の白きより更に白し、と將來を祝したのである。

菅沼亭

京にあきて此木がらしや冬住居

(笈日記)

同時の吟で、「一葉集」には端書が「三河新城の家士菅沼權右衛門宅」とあり、「きれく打込」には「菅
沼耕月亭」にてとして、耕月の脇、支考第三、四句目白雪の歌仙表及裏二句あるが、紙魚に食はれて
明かにしがたいと記してある。

二冬過ごした京附近にもあきて、またの旅に、耕月亭の冬住居に、しみくくと味ひきく此木枯やナアと詠歎したのである。

耕月亭にて

雪をまつ上戸の顔やいなびかり
雪をまつ上戸の額いなびかり

(茶の冊子)

(はせを鹽)

これも同時の吟で、「茶の冊子」には師走の部にあるが、それは「雪」といふ季語の関係から師走に置いたのであらう。

稻光りがピカ〜とした、いよ〜雪だナ、と降ることを豫期する上戸の貌やナア、と詠歎したのである。後句では、雪らしいナと豫想する上戸の額へ、稻ひかりがピカリとさした意になる。

おなじ頃鳳來寺に参籠して

木枯に岩吹とがる杉間かな

(笈日記)

「笈日記」三河部に次の句と共にある。

煙巖山鳳來寺は新城を距る三里餘のところ鳳來山腹に在り、推古天皇の勅願に依つて創立し、天台、真言を兼修し、三河第一の巨刹である。

境内の亭々たる巨杉に木枯が轟々と吹いてゐるので、あの木枯の爲めに、境内の巖がかく吹とがる、杉の木の間なるかな、と観じての詠歎である。

夜着ひとつ祈り出して旅寝哉
夜着ひとつ祈り出したる寒かな

(笈日記)

(芭蕉句選)

「笈日記」に前句と並んであり、「茶の冊子」には端書が

三河國鳳來寺に詣る道すがら、例のやまひ起りて、ふもとの宿に一夜あかすとして、

として、句は「笈日記」と同じである。
持病になやまされて、夜着を一つ請ひ得ての旅寝なるかな、といふので、修験寺であるから「祈り出して」と云つたのである。

元禄三(四の誤)年の冬、栗津の草庵より武江におもむくとて、嶋田の驛、塚本が家にいたりて

宿かりて名をなのらするしぐれかな
宿かして名をなのらするしぐれかな
(續猿蓑)
(小文庫)

「續猿蓑」に元禄三年とあるが、江戸下向は四年だることが確かである。晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄七年とあるは「四」の誤植である。「嶋田」は東海堂五十三驛の一で駿河の大井河畔。「塚本」は通稱は孫兵衛と云ひ、如舟と號す。

「かり」と「かし」と自他の差があるので頗る解釋にくるしむ。

(一) 宿を借りる場合、こちらから名のるのが普通であるのに、今日はそれと反対に、如舟の家に泊つたところが、あるじが座敷に出て来て、わたしが如舟です、と名のつた、つまりこちらからでなく先方から名のらしめた、時雨なるかな、と詠歎したので、此方が正しいであらうと思ふ。
(二) 如舟が我に宿をかして、わたしが芭蕉でござる、と名のらしめた、時雨なるかな、といふのである。

馬かたはしらじ時雨の大井川
(泊船集)

「芭蕉句選年考」には「いづれの年の吟なるや不知」とあり、晋風氏は「芭蕉句集定本」には元禄四年とし、「大系本芭蕉一代集」には元禄三年とし「新編芭蕉一代集」には貞享四年説としてゐる。自分は「宿かりて」は如舟との初対面の句であらねばならぬと解する。又「句選年考」に此句の詠草は塚本氏に藏さるゝとある、さすれば勢ひ元禄四年より以上には廻らしめ得ないと思ふ、即ち晋風氏の「定本」の元禄四年を以て適當と信ずる。

川越の人夫どもや旅客ががや／＼とわめきたて、雑沓を極めてゐる、この時雨の大井川の有様は、馬に旅客をのせて、悠々と手綱をひき行くかの馬方はよも知るまい、と推測したのである。

都出て 神も旅寝の日數哉 (己が光)

元祿五年の「己が光」に

翁つゝがなく霜月初の日、むさしの、舊草にかへり申さる、めづらしくうれしく、朝暮敲戸の面々に對して

として此句がある。一時日本橋橋町に假の住居を定めての吟である。

我も十月初め都を出て霜月に江戸へ、神々も出雲の神集ひを終つて國々へ、共に旅寝の日數なるかなと詠歎したのである。

行脚としをかさねて東武にかへり

ともかくもならでや雪の枯尾花 (北の山)

元祿五年の「北の山」にある。「一葉集」には端書が

三秋を経て深川の草庵に歸ければ、舊友門人日々にむらがり来て、いかにと問ば、こたへ侍る。とあるが、深川の庵は五年五月に出来たのだから、これは橋町の假寓での作で「一葉集」の「深川の草庵」は誤である。「すや」は疑問終止、「ぬや」は感歎終止であるが、「でや」は反語或は疑問云起しの格である、然るにこゝでは反語とは見られないので、勢ひ疑問の云起しと見なければならぬのである。

我は宛かも雪に覆はれし枯尾花の如くに、もし雪の覆ふことなくば、すでに風に吹き折られてしまつたであらうに、幸ひ雪に護られて、ともかくもならでや即ち死にもせでや、かくは事なくあるならん、しかとはわからぬが多分さうだらう、と想像したのである。

菊の後大根の外さらになし (陸奥千鳥)

元祿四年

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。

菊は花の隠逸なるものとは漢詩に屢歌はれて居り、また元槿の詩中に此花開後更無花ともある。それで、花中の隠逸なるものとせらるゝ菊の後には、食味の隠逸なるもの大根の外には更はない、といふのである。

雁 さわぐ鳥羽の田づらや。寒の雨

(西華集)

雁 さわぐ鳥羽の田面の寒の雨

(芭蕉句選)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年前とするにしたがふ。「西華集」に

此句は武江に有りし冬ならん、寒の雨といふ名珍しければ、各發句案したるに、寒の字の働き此句に及び難し。とある。

(一) 今まで鉛色にどんよりしてゐた空が、やがて寒の雨になつて、雁がさわぐ鳥羽の田づらやナアと詠歎したのであり。

(二) 雁がさわぐ鳥羽の田面の寒の雨かな、と詠歎の省略十九字心切格である。

日 ごろにくき。鳥も雪の朝哉

(薦獅子)

日 頃にくむ。鳥も雪の朝かな

(芭蕉翁發句集)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年説とするにしたがふ。

平常は何かにつけても小憎く思ふ鴉すらも、また一風情ありと見らるゝこの雪の朝なるかな、と詠歎したのである。

小町畫讚

貴 さや雪降ぬ日も蓑と笠

(己が光)

―元祿四年―

元祿五年の「己が光」にある。「本朝文鑑」に卒塔婆小町の贊

あなたふとく、簀もたふとし、笠もたふとし。いづれの人かかたりつたへ、いかなる人か寫しと
どめて、千歳のまぼろし今こゝに現ず。そのかたちある時は、たましるもまた爰にあらん。簀もた
ふとし、笠もたふとし。

として此句がある。卒塔婆に腰をかけてゐる老いさらばへる小町の像を見て、雨乞小町、草子洗小町
と世にうたはれた盛時よりも、むしろ雪のふらぬ日も簀と笠を携へてゐる、この落魄した小町の方が
尊い、と詠歎したのである。

旅行

煤 掃 は 杉 の 木 の 間 の 嵐 哉
煤 掃 は 杉 の 一 木 の 嵐 かな

(己が光)

(芭蕉句選)

元祿五年の「己が光」にある。

杉並木のほたりを行くと、そこで煤を掃いてゐる、田舎の煤はきは青篠でざはくがさくくとやる、
其音があだかも杉の木の嵐の如くなるかな、と詠歎したのである。

魚 鳥 の 心 は し ら す 年 わ す れ
魚 鳥 の 心 は し ら す 年 の 暮

(浮世の北)

(陸奥千鳥)

晉風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年とするにしたがふ。

此句は「年忘」と「年の暮」の差で

(一)年の暮に離齧と奔走する人間共は、あの木の間に水中に、悠々自適する魚鳥の心は知らず、と
見る。

(二)来る春を待つ用意とて、人々は楽しけであるが、正月の料にとて店頭に賣らるゝ魚鳥の心は知
らず、即ち同情もせぬ、と見る。

(三) 年忘れとて徒らに口腹の欲に使役されて、かの悠々自適する魚鳥の心は知らず、と見る。
(四) 年忘れとて自分だけは悦ばしさうだが、店頭の魚鳥には些の同情心もない。
の四様に解し得ないこともない、しかし自分はこの第一解を採る。

元禄五年 壬申 (四十九歳)

蒟蒻にけふは賣かつ若菜哉

(若菜)

元禄八年芭蕉一周忌追善嵐雪編の「若菜」に、「吹揚らるゝ春の雪花」と嵐雪の脇で、對吟の歌仙がある。

年代に就いては、「芭蕉翁發句集」には元禄五年とし、「芭蕉句選年考」には「何れの年の吟なるや未知」とし、「幽蘭集」「一葉集」には元禄二年とし、「芭蕉袖草紙」には元禄五年とし、晋風氏は「芭蕉俳句定本」には五年とし、「大系本芭蕉一代集」には二年とし、「新編芭蕉一代集」發句の部には五年とし、書翰部

には、「若菜籠」所載の正月二日附、杉風宛、

先刻は爲御慶御出被下候處、近所を參候て早々御出之儀恭候。此方儀者隠士故五ヶ日も過候て可參候。仍て一句口すさび申候故如此候。「こんにやくにけふはうり勝若菜哉」唯風情斗之内にて候。何事も春永に可申承候。かしこ

及び「俳諧奇跡録」所載の廿三日附、秋風宛、

追て申入候。此度三度飛脚に申遣候事は、京の勝手能存候故指圖せられ候て。からす丸通りにていづれにても御誂御下可給候。文庫并革にて覆ともに頼入候、料は書付御下し可被成候。又々飛脚に上可申候。さて俳諧もはやり申候。何を申てもけはしき處故しみくとは出來不申候。此ほど愛宕の下へ參申候。二三會も興行有之、江戸衆も參り、上手になられ悦び申候。「蛤にけふは賣かつわか葉哉」右の句を元にして百韻いたし、其節其角なども參りおもしろく慰み申候。貴丈事噂申出候。猶追々可申入候。

をあげて、共に元禄二年としてゐる。又「三冊子」には

この句、はじめは「蛤に」など、五文字有、再吟して後「こんにやく」になり侍ると也。

とある。先づ秋風宛書翰に就て考察するに、京都の秋風とは即ち三井秋風であらう。貞享二年秋風を訪ねて、「梅白し」椗の木の」の二句あるが、「去來抄」によれば、初めは騷人を愛すると聞いて、彼にむかへられたが、「其後招けども行かず」とある、さすればそれより四年後の元禄二年に、在京の去來凡兆をさし置いてかゝる馴れよく、しい書翰を送つたとは思はれぬ、特に秋風宛に「江戸衆も上手にたられ」とは芭蕉の筆致とは肯定出来ない。又其角も加はつたといふ「蛤の百韻」は何所にも見られない。更に杉風宛正月二日附に「蒟蒻」とあるに、それより後の廿二日附に「蛤」とあるのは、前案再案が取ちがつてゐる、それらを総合して秋風宛書翰は怪しいものと斷ずる。杉風宛のものは信用出来るが、年代の資料にはならない。年代を定むる資料なく、諸家の所説も雑多なりとすれば、たゞ不明としてこれを抛棄するか、或は全く自己の直感的見識によつて想像するより外に方法がない。よつて自分は「芭蕉袖草紙「芭蕉翁發句集」晋風氏の「新編芭蕉一代集」の元禄五年説を是なりと認むる。いつも蒟蒻の方がよく賣れるのに引かへて、今日即ち正月六日は、其蒟蒻に賣りかつ若菜なるかな、と詠歎したのである。初案の「蛤」を「蒟蒻」に改めたのは、その佗びた感じが芭蕉の心をひきつけた爲もあらうが、「今日は」に對照して日常の事を考ふるときに、「蛤」よりもよりふさはしく思ひ得らるゝからであらう。

猫の戀やむとき閨の朧月

(己か光)

元禄五年の「己か光」にある。

戀猫の噪がしい聲がやむ、その時閨の戸にほんのりとおぼろ月の光がさす、といふ純客觀の句である。

梅が香やしらゝちくば京太郎
 梅咲くやしらゝ落窪京太郎

(忘れ梅)

(隨齋諧話)

元禄五年尙白編の「忘梅」にある。「梅咲くや」は成美の記憶違ひであらう。

「しらゝ」落窪「京太郎」は共に物語本の名で「隨齋諧話」に

しらゝ以下はみな古物語の標題なりとばかり覚えて儲かなる説なし。會頃小野のお通がつくれる淨瑠璃物がたりといふものを傳へたる人ありて一見嗜しに、姿見の段といへるに云。まなの上手にかなの一、よみけるさうしはどれ／＼ぞ、源氏さごろも古今萬葉いせもの語、しらゝおちくぼ京太郎百餘帖の虫つくし、八十餘帖の草づくし、扇流しに硯わり、云々。この物語の眞偽はしばらく論ぜず、いかにしても今の文章ならず、はせをの頃にもてはやせしものとおぼゆ、此句たゞちにその文句をとれるなるべし。案するに落窪物語は今につたへてあり、しらゝ京太郎は傳はらず、中にもしらゝは古き物にや、さらしな日記に云。源氏の五十餘卷ひつに入ながら、在中將、とほきみ、せりかは、しらゝ、あさうつ、などいふ物語とも一袋にとり入れて、えてかへる心地のうれしさいみじきや。又古今著聞集卷五に、しらゝといふ物説に、しらゝの姫君、男少將の迎へに來んとちぎりて遅かりしを待つとてよめる「たのみつゝ來がたき人を待つほどに石にわが身はなりはてぬべき」かく見えれば、しらゝも建長頃まではありしなるべし。

とある、即ちこの淨瑠璃物語から出たことは明かである。眼前に梅花が咲き誇り馥郁として芳香をはなちつゝある、それに對して、そこに、しらゝ落窪京太郎

などの諸物語に讀み耽る、淨瑠璃姫のやうな可憐なる上臈姿の在るが如くに連想したのである。

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

(薦獅子)

元祿六年の「薦獅子」にある。五年六年何れでもあり得ると思ふが、晋風氏の「新編芭蕉一代集」に五年説とするにしたがふ。

月はまどかに梅は清香を放つ、かくて春も次第／＼に其風情がそろひとゝのふ、といふのであるが、「けしきとゝのふ」などいふところが、後の月並者流に影響して悪い結果を生じたのであらう。

人も見ぬ春や鏡のうらの梅 (己が光)

元祿五年の「己が光」にある。

昔の鏡はすべて黄銅製で、裏面には松竹梅或は鶴龜などの文様が鑄出してあつた。

今や諸所の梅は、文雅の人々に鑑賞されるころであるが、この鏡の裏に鑄出されてある梅は、たれもが見つけぬ春やナア、と詠歎したので、世の表面にたゞぬものは、他の注意をひかぬ意を寓しのべたのである。

緩歩

かぞへ來ぬ屋敷くくの梅やなぎ

(一字幽蘭集)

大小直參の屋敷が並んでゐる山の手邊、甲の屋敷は板扉越しに梅が見え、乙の邸は土扉に高く芽柳が垂れてゐる、それを必ずしも一つ二つと正確にはないが、數へるとはなしに數へつゝ來た、といふので、いかにも春の日を浴びて緩歩する作者の後姿が見えるやうである。

鶯や餅に糞する椽のさき。

(葛の松原)

鶯や餅に尿する椽の上。

(末若葉)

元祿五年の「葛の松原」にある。「百嘲」に「日は眞すぐに晝のあたゝか」と支考の脇、以下對吟の歌仙がある。また「芭蕉翁眞跡集」に杉風宛、二月七日附の書翰に、此句のあとに、「日頃工夫の處にて御座候」とあるのを以て、此句には自信をもつてゐたことが察せられる。

一般には此句を、鶯が餅に糞をする、と解して平然として何の疑ひを挾まないのはどうしたことか、「鶯が」と「鶯や」とは「が」と「や」の相違がある、鶯がするものなれば「が」又は「の」で足る、然るに「や」としたのは何故か、それは鶯が糞することを想像し或は疑ふ爲めに「鶯がや」とすべきもの、省略即ち疑問云起「や」である。更に一句を解剖すれば、「縁の上」は其場所であり、「糞」は其所置さるべきものであり、最重要なるは其主格たる「鶯」及び其動作を表すところの「する」の二つである、其併合なる「鶯がする」「鶯やする」に於て如何に「が」と「や」との差の顯著なるかが知らるゝであらう。「鶯やする」は全く「人や行く」と同じ格で、其「する」「行く」動作を想像又は疑つた意になるのである。

句意は、芭蕉が一日橋町の庵に在つて、ふと庭前を見ると鶯があちこちと枝移りしながら鳴いて居り縁先には正月の残りの餅が干してある。そこで芭蕉が、あの鶯がや或は縁先に來て餅に糞をするナラ

ン、と疑つたのである。

此句は「餅」「鶯」の實在物から、「糞するナラン」と想像の生れたところ、即ち客観から主観に轉じたところに妙味がある、さればこそ自身も「日比工夫の處」と云つてゐるので、單に縁先の餅に糞をするものと、糞をするではないかと思ふものと、比較して見れば其優劣は直に判明するであらう。

鶯 や 柳 の う し ろ 藪 の ま へ

(續猿蓑)

「續猿蓑」は芭蕉没後の元禄十一年の出版で支考が多少の小細句をしたものとは一般に認めてゐるがとにかく芭蕉が生前其幾分手をつけて置いたものと見られる。晋風氏の「新編芭蕉一代集」の五年説とするにしたがふ。

鶯の聲が聞える、それが先刻は柳の後あたりと思つたが、今は藪の前あたりであると、彼が煦々たる春光を浴びて、嬌音を弄しつゝあちこちと移動してゐるさまを云つたのである。

蜆子の畫讚

白 魚 や 黒 き 目 を 明 く 法 の 網

(韻 塞)

「芭蕉翁發句集」に元禄五年とするにしたがふ。「傳燈錄」に

京兆の蜆子和尙は何れのところの人たるかを知らず(中畧)常日江岸に沿って蝦蜆を採掇して以て腹を滿たす、暮るれば即ち東山の白馬の紙錢中に臥す、居民目して蜆子和尙となす(中略)竟に徒を聚めて法を演ぜず、唯だ伴狂するのみ。

とある。海老やしじみを常食とし、説法もしない、そこに此和尙の一般僧侶とは違つた見識がある。それで、この蜆子和尙の法の網にすくはるれば、海老やしじみばかりでなく、白魚もやまた黒き目を開く即ち解脱するならん、と、想像して和尙の法徳を賛美したのである。

木 曾 の 情 雪 や 生 ぬ く 春 の 草

(小文庫)

「芭蕉翁發句集」に元祿五年とし、晋風氏の「新編芭蕉一代集」にも五年説としてある。「芭蕉句選年考」は火災後信州に遊んだ時、即ち天和三年ではないかと云つてゐる、元祿五年には木曾に行かぬから或はさうも思はれるが、また必ずしも其年其地を踏まざとも、會遊の追憶でもよまぬこともあるまいと思ふので、しばらく前の二集の元祿五年説にしたがふ。

「情」は「こゝろ」まこと「即ち」木曾路の眞」といふ意で、春の草が、雪をや生え抽んづるナランと木曾はまだ雪はありながらも、さすがに春の氣分のどこかに見え初むるので、かく想像したのである。

富花月。草庵に桃櫻あり、門人にキ角嵐雪あり

兩の手に桃とさくらや草の餅

(桃の實)

元祿六年の「桃の實」にある。又蓼太の「未來記」に「翁に馴れし蝶鳥の兒、嵐雪」野屋敷の火繩もゆるす陽炎に、其角」以下三吟の歌仙がある。

此句はすべてが譬喩で、草の餅即ち我が草庵には、今や兩の手に嵐雪の桃花と其角の櫻花やナア、と

双璧あることを誇つて詠歎したのである。芭蕉は四十九歳、嵐雪は四十一歳、其角は三十四歳、まことにこの感があつたらう。

東行(支考)錢別

此こゝろ推せよ花に五器一具

(葛の松原)

元祿四年の冬芭蕉に伴つて江戸に下つた支考は、五年春さらに奥羽行脚に立つた、その時の送別吟で「葛の松原」にある。然るに晋風氏の「新編芭蕉一代集」には發句の部には五年作とあるに、書翰部には元祿四年として、加賀豊三郎氏所藏の、蘭風宛

支考が松しま行脚の時に器を得て一句錢別に遣しける、「此心推せよ花に五器一具、(中略)少々粟津邊へも御たより待入候

を採つてゐるのは何故であらう、此狀によれば四年の春近江で支考を送つたことになり、其冬更に支考を伴つて江戸へ下つたものと見なければならなくなる、かた／＼此書翰は怪しむべきものである。

五器は正しくは食器と書くが、こゝでは専ら雲水僧の携帯する一組の食器であることは前にものべてある。

我等佗人の境涯は花にもたゞこの五器一具で事足る、支考よ、このまことの佗人の心をよく推し知れよ、といふので、芭蕉には支考の性質がわかつてゐるので、あらかじめ訓誡したものであらう。

子に飽くと申す人には花もなし

(類柑子)

晉風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿五年説とするにしたがふ。「類柑子」雛ひく鳥の條に

「桐火桶」に、抑貫之が萬葉の歌には、これらぞまことある歌といへるに「日くれたり今かへりなし」
子なくらんその子のはゝもわれをまつらん

として、此句と他の人の句が八句並んである。「一葉集」の端書「示門人」は何によつたものか。

子に對する愛、それは絶對のものである、しかるにその子に飽きるといふやうな人には、月も花もない、即ち愛の心の乏しい人には、自然そのものに愛を感得することを根源とする風雅の道は理解さる

べくもないといふ意である。

花を見る。是もたぐひか鼠の巢

(佐郎山)

花にねぬ。此もたぐひか鼠の巢

(有磯海)

元祿五年の「佐郎山」にある、「有磯海」には端書が

櫻をばなどねどころにせぬぞ、花にねぬ春の鳥のこゝろよ。

とある。「見る」と「寝ぬ」では句意が全くちがふ、しかし「有磯海」の方が信用し得るので、其方で解をすゝめる。端書は「源氏物語」若葉の卷に

「いかなれば花に木つたふうぐひすのさくらをわきてねぐらとはせぬ」

春の鳥の梅ひとつにとまらぬ心よ、あやしと覺ゆることぞかし。

即ち何故に櫻を特に寢所とはせぬぞ、他の花に木つたうて寝ぬ鳥の心の、あやしう覺ゆることよ、とあるのから出てゐるのであらう。

句意は、天井裏に噪ぐ鼠は、これもまた、花にうかれて櫻を寝どころと定めぬ春の鳥のたぐひか、と詠歎したのである。

不卜一周忌、琴風興行

杜 鵑 啼 音 や 古 き 硯 ば こ

(陸奥千鳥)

不卜は岡村市郎右衛門一柳軒と號し、元祿四年四月九日に歿したのだから、一周忌は即ち五年四月である。琴風は初め不卜門で、後芭蕉に、更に其角に従つた。

俳諧連歌の席上のそこには、文臺、硯函と置かれてある、それも今は「古き」遺品といふべきものになつた、折から一聲時鳥の鳴く音やナア、と詠歎したので、我も亦泣く音の餘意をもつものである。

鎌 倉 を 生 て 出 け ん 初 鰹

(葛の松原)

鎌 倉 は 活 て 出 け ん 初 鰹 魚

(類柑子)

元祿五年の「葛の松原」に

かまくらの句は、支考が東より歸りけるとき、かゝる事ありとて見せ申されしを、「生て出る」といふに「鎌倉」の五文字、又その外あるべくとも承はらずと申たれば、うれしくき、待るとて、阿叟もにくみ申されしが、みづからも微幸にいひなしぬらむ、つらくおもへば、生死のさかひを以て出入せむに、鎌倉六波羅の外殊に有べからず。しばらく風雅にあそぶ人も、いきて鎌倉を出し鰹の、いまは武江の薄鹽となりけるよと、世の觀相にのみ眼をとどむる事、此句ばかりにもかざるまじ。

とあり。「三冊子」には

師の曰、心遣はずと句になるもの自賛に足らずと也「鎌倉を生て出けん初鰹」といふこそ、心の骨折、人のしらぬ所也とある。

現代人の句ならば、初魚松に對して、鎌倉を出る時はまだ生きてゐたらう、と過去を想像したものと

のみ見てよいのだが、芭蕉と支考の對話にもある如く、「鎌倉」と「生」といふことに、大に作意があるとするのは、元祿時代の句風なのである。

五月 雨や桶の輪切る夜の音

(一字幽蘭集)

元祿五年の「一字幽蘭集」にある。

幾日となく降りみ降らすみの五月雨ごろ、或夜厨の方で桶の輪のはねた音がした、といふので、いかにも「夜の音」と云ふにふさはしい感じである。

晋の淵明をうらやむ

窓 形 に 晝 寝 の 臺 や 簞
窓 形 に 晝 ね の ご ざ や 簞

(續猿蓑)

(三冊子)

「芭蕉翁發句集」の元祿五年とするにしたがふ。

晋の陶淵明は隱逸を以て名高く、其歸去來辭の中にも「倚南窓以寄傲、審容膝之易安」とあり、また別に「夏月虚閑、高臥北窓下、清風颯至、自謂義皇上人」などの句がある。

其陶淵明の心境を羨んで、我もまた簞をしいて、窓なりに其下に設けた晝寝の臺やナア、と詠歎したので、「三冊子」には再案が「ござや」であるとしてゐるが、「簞」に更に「ござ」といふには及ばぬこととで、此説はうけがはれない。猶此句は簞の句で、まだ此頃には晝寝を季語と見てゐなかつたことを附記して置く。

子ども等よ晝顔咲きぬ瓜むかん

(藤の實)

「芭蕉翁發句集」に元祿五年とするにしたがふ。

晝顔の花が開いて日盛りになつた、子ども等よ瓜などむいて食べやうといふのである。

夕顔や酔てかは出す窓の穴

(續猿蓑)

「芭蕉翁發句集」に元祿五年とするにしたがふ。

垣根のほとりには夕顔の花が白く浮んで見える、穴ともいふべきほどの小窓から、微醺のあるじ即ち芭蕉自身が、ちよつと首さしのべて其夕顔の白いのを見やる、といふ庵中の即景である。

芭蕉葉を柱に懸む庵の月

(蓬萊嶋)

「三日月日記」と「蓬萊嶋」に「芭蕉を移す辭」といふ文章があつて、兩者内容を異にして居り、後者には末に此句がある。こゝには後者を畧して前者のみを掲げる。

菊は東籬にさかへ、竹は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非にありて世塵にけがさる。荷葉は平地にたゞず、水清からざれば花咲かず。いづれの年にや、栖を此境に移す時、芭蕉一もとを植う。風土芭蕉の心にやかなひけん、數株の莖を備へ、其葉茂りかさなりて庭を狭め、萱が軒端もかくるゝば

かりなり。人呼んで草庵の名とす。舊友、門人ともに愛して、芽をかき根をわかつて、處々に送る事年々になんなりぬ。一とせみちのくの行脚思ひ立て、芭蕉庵すでに破れんとすれば、かれは籬の隣に地を替て、あたりちかき人々に霜の覆ひ風のかこひなど、かへすゝたのみ置て、はかなき筆のすさびにもかき残し、松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅寢の胸にたゞまり、人々のわかればせをの名残、ひとかたならぬ侘しさも、終に五とせの春秋を過して、ふたゞび芭蕉になみだをそゞぐ。今年五月の半、花たちばなのにはひもさすがに遠からざれば人々の契りも昔にかはらず、猶あたり得立去らで、舊き庵もやゝちかう、三間の茅屋つぎゝしう、杉の柱いと清げに削なし、竹の枝折戸安らかに、葭垣厚くわたして、南にむかひ池にのぞみて水樓となす。地は富士に對して、柴門景を追てなゞめなり。浙江の潮、三つまたの淀にたゞへて、月を見る便よろしければ、初月の夕より雲をいとひ、雨をくるしむ。名月のよそほひにとて、先づ芭蕉を移す。其葉廣うして琴をおほふにたれり。或は半吹おれて鳳鳥の尾をいたましめ。青扇破て風を悲しむ。適々花咲どもはなやかならず、莖太けれども斧にあたらず。かの山中不材の類木にたゞへて其性たふとし。僧懷素はこれに筆をはしらしめ、張橫槩は新葉を見て修學の力とせしとなり。予其二つをとらず、唯此蔭にあ

そびて、風雨に破やすきを愛するのみ。

「一葉集」の端書

柱は杉風積風が情を削、住居は曾良岱水が物數奇を佗ぶ。なを名月のよそほひにと 芭蕉五もとを
栽たり。

とあるのは、「蓬萊鳴」所載の文章中の抄録である。

二つの「移芭蕉詞」を比較して見ると、其文勢から、「蓬萊鳴」所載のものは、五月芭蕉を移植した直
後の初案で、句も其時に於て來ん秋を期待したものであり、「三日月日記」所載のものは、秋に至つて
の再案であることが推測される、隨つて此句は秋季に於ての作と見るよりも、夏季に於ての作と見る
方が價值が高い。故に文は秋季再案のものを掲げたが、句解は、夏季初案の意を以てする。
舊友人の厚意で四度めの深川の庵が新に就り、そこに愛する芭蕉を栽た、かくてやがて來ん秋、我庵
の月の夜は、其清光が、この芭蕉の葉の影を柱に懸けん、と未來を云つたのである。

素堂の母七十あまり七としの秋、七月七日にこ

とぶきするに、萬葉七くさをもて題とす。これ
につらなる者七人、此結縁にふれて、各また七
叟のよはひにならむ。

七 株 の 萩 の 手 本 や 星 の 秋。
七 株 の 萩 の 手 本 と や 星 の 縁。
七 株 の 萩 の 千 本 や 星 の 秋。

(韻 塞)

(秋の七草)

(一翁四哲集)

晋風氏の「新編芭蕉一葉集」に元祿五年説とするにしたがふ。「一翁四哲集」に

杉風家藏七種の巻物に「萩の千本」とあり、百五十年來「萩の手本」と誤り來れり。

と頭註がある。「韻塞」に萩芭蕉、尾花嵐蘭、葛の花沾徳、撫子曾良、女郎花杉風、藤袴其角、朝顔素
堂の七句がある。

此句は「手ほん」「手もと」「千もと」の読み方で句意が變る、其うち「手もと」は如何にも意義が通じ
ない、これは恐らく誤りであらう。自分は「手ほん」説を採る。

「手ほん」としての解は、星の秋即ちその七夕の夕に、素堂の母刀自の七十七の賀會を催すことは、刀自の長壽を、この席に列なる七株の萩即ち七人のものゝ手本やナア、と詠歎したのである。「千もと」としての解は、七十七歳に七月七日、更に七草に七人、と數を重ねて、七株の萩の條の幾千本やナア、と壽の無量なることを詠歎したのである。

三日月や地は臙なる蕎麥畠
三日月の地は臙なり蕎麥畠
三日月に地は臙なり蕎麥の花

(三日月日記)

(泊船集)

(浮世の北)

「三日月日記」の素堂の序に

我友芭蕉の翁、月にふけりていつはとはわかぬものから、殊に秋を待たたりて求なし、ある時は敦賀の津にありて、越のうみにさまよひ、其さきの秋は、石山の高根にしばし庵を結びて、琵琶湖の月を詠じ、二とせ三とせをへだて、此心の秋に共にあふなるべし。文月のはじめは蚊のふせ

ぎも静ならず、玉祭る頃は是にかかつらひ、有明の頃下弦の頃も雨のさはりのみして、初秋は暮れぬ。中の秋に至りて、はつ月のわづかなる頃より、夜毎に名月の思ひを爲し、曇りみ晴れみ扉をおほふ事稀なり。我庵近きわたりなれば、月にふたり隠者の市をなさんと、自ら申しつることぐさも古めきて、入來りたる人々にも句をすゝむる事になりぬ。昔より隠の實ありて、名の世にあらはるゝ事月の心なるべし。我身はくもれと捨られし西行だにくもりもはず、苔の衣よかわきだにせよとかくれまします遍昭も隠れはず、人の呼ぶに任せて僧正とあふがれ給ふも、猶風流のためしならずや。此翁のかくれも必ず隣あり、名もまた呼ぶにまかせらるべし。

とある、元祿五年深川に於ての吟である。

三日月や、と先づ空に利録の如き形を仰ぎ、更に、地は臙なる蕎麥畑かな、と蕎麥の花の白きを詠歎した省略法である。

「三日月の」方では、三日月の爲めに地は臙なり、と見るか、或は、三日月の蕎麥畑の地は臙なり、と見るか兩様であるが、何れも先づ「三日月や」と月を見て、更に地に轉ずるものに比しては句境がある。

「蕎麥の花」と明らさまにしては、月の句でなく、蕎麥の花の句になり、作者の趣旨にたがふことになる。

名月や門へさし來る。汐がしら

(桃の實)

名月や門にさし來る。汐がしら

(名月集)

名月や門にさし込。汐がしら

(小文庫)

元祿六年の「桃の實」にあり、また「三日月日記」にもあるので五年の作たることが知られる。

「へ」は「其方向へ」の意であり、「に」は「そこに」の意で、似てはゐるが、「へ」の方が場面が大きく見え、「來る」と「込む」も、同様「來る」といふ方がゆつたり見える。

空には皓々たる月光を仰ぎ、地には我門邊をさしてふくれ來る汐を眺める、といふ叙景である。

閉關

朝顔や晝は錠おろす門の垣

(炭俵)

元祿七年の「炭俵」にあるので、「芭蕉句選年考」には「元祿六年の句なるべし」と云つてゐるのは、文末に「五十年の頑夫」とあるからだらうが、それは文の勢ひで、四十九歳を五十と云つたのであらう。五六兩年の他の作品を通覽して、此句は五年の作と見るのが妥當である。「小文庫」に「閉關之説」といふ

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめに置けりといへども、さすがに捨がたき情のあやにくに哀なるかた／＼もおほかるべし。人しれぬくらぶ山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて忍ぶの岡の人目の鬮も、もる人なくばいかなるあやまちをか仕出でむ。あまの子の浪の枕に袖しほれて、家をうり身をうしなふためしも多かれど、老の身の行未をむさぼり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわかまへざるにははるかにまして、罪ゆるしぬべく、人世七十を稀なりとして、身の盛なる事はわづかに二十餘也。はじめの老の來れる事一夜の夢のごとし。五十年、六十年のよはひかたぶくより、あさましようくづをれて、宵寝がちに朝をきしたるね覺の分別、なに事をかむさ

ぼる。おろかなる者は思ふことおほし。煩惱増長して一藝すぐるゝものは是非の勝る物なり。是をもて世のいとなみに當て、貪慾の魔界に心を怒し、溝洫におぼれて生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて閑にならむこそ老の樂とは云ふべけれ。人來れば無用の辯あり出ては他の家業をさまたぐるもうし。友なきを友とし、貧を富りとして、五十年の頑夫自書、自禁戒となす。

の文章の末に此句がある。

籬には朝顔が咲いてゐる、それを打見やつて、さて思へば人生もまた此花の如く、忽ちにして凋落してしまふものである、其短き一生の内を「人來れば無用の辯あり、出でては他の家業をさまたぐるも憂し」故に晝間は垣に錠を下して、一切他との交渉を断つことにする、といふのである。

深川閉關の比

薺や是も又我が友ならず

(今日の昔)

此句も端書によつて同じころの作たることが知られる。垣の朝顔は瑠璃に藍に紅白に、各其色の鮮かさを競ふが如くである、これまた佗び人たる我が心の友ならず、と其妍を競ふさまを疎んじたのである。

此寺は庭一杯のばせを哉

(誹諧會我)

元夜十二年の「誹諧會我」にあるが、晋風氏の「新編芭蕉一代集」元祿五年説とするにしたがふ。或寺院を訪ねたら、そこには庭前に芭蕉が繁茂してゐるので、此寺は、庭一ぱいの芭蕉なるかな、と我が庵の四五株の芭蕉に思ひ及んでの詠歎である。

深川夜遊

青くても有べきものを唐辛子

(深川)

濱田酒堂（珍夕、珍碩）の

壬申九月に江戸へくだり、芭蕉庵に越年して、ことしきさらぎのはじめ、洛にのぼりてふろしきを
とく。

との自序ある「深川」にある。壬申は即ち元祿五年である。同集には「提ておもたき秋の新ラ銀」
酒堂「暮の月槻のこつばかたよせて、嵐蘭「坊主がしらの先にたゝるゝ借水」の四吟の歌仙がある。
古來いふところの「を廻し」格の句で、唐辛は青くても澤山であるべきものを、まあ眞赤になつたこ
とよ、といふべき下部が省略されてゐるので、素地そのまゝでよいのに、世上の人は粉飾を専らにす
る、といふ人生觀を餘意としてゐる。

初茸やまだ日數經ぬ秋の露

（小文庫）

初茸やすたりかぞへぬ秋の露

（芭蕉句選）

根津史邦が元祿五年の秋江戸に下つて、深川の庵で興行した歌仙の發句で、自集「小文庫」には發句

のみであるが、「猿舞師」には「青き薄ににぐる谷川、借水」野分より居むらの替地定りて、史邦「以
下、半落、嵐蘭の五吟一卷である。

初茸が生えてゐて、それが露にぬれてゐる、併しそれも秋に入つたばかりでまだ日數を経ぬ露なるか
な、と詠歎の結尾省略格である。

「すたりかぞへぬ」はどうしても初茸に關係をもつ語である、さうすると、初五の「や」は疑問云起
格になつて、初茸はやすたりを數へぬナラン、と想像したものと解すべきである。

それで自分は、この句は初案再案の差でなくて、「まだ日かずへぬ」と「すたりかぞへぬ」と、何れが
正しいかは不明であるが、とにかく何れかの一方は、草體文字の誤讀によるものと推測する。

松茸やしらぬ木の葉のへばりつく

（續猿蓑）

「笈日記」伊賀部に支考は元祿七年の條に、

九月二日、支考はいせの國より斗從をいざなひ、伊賀の山中におもむく。是は難波津の抖擻の後、

かならず伊勢にもむかへむと也。三日の夜かしこにいたる。草庵のもうけもいと心さびて、「蕎麥はまだ花でもてなす山路かな」松茸やしらぬ木の葉のへばり付」この松茸をその夜の巻頭に乞うけて、一歌仙侍り爰に記さず。

とありて、「芭蕉翁俳諧集」には「秋の日和は霜でかたまる、文代」「宵の月河原の道の中程に、支考」以下、雪芝、猿雖、望翠、惟然、卓袋、荻子、の歌仙がある。これによれば、元祿七年の作たること疑ふべき餘地もないやうであるが、「芭蕉句選年考」に

元祿五年の忘梅集に見えたり。按ずるに笈日記を見る時は元祿七年と聞ゆ、又續猿蓑に、伊勢の斗從に山家をとはれて「松茸やしらぬ木の葉のへばり付」此前書消して「蕎麥はまだ花でもてなす山路哉」の句に此前書あり、然れば此松茸の句は、斗從に訪はれる時の句にはあらざる故に（前書を）消したるなるべし。笈日記に、其夜の巻頭とせしは、かねて吟じ置きたる松茸の句を、此夜語り出して、其折に似合しければ巻頭とせしにや。

とある。この説にしたがつて元祿五年とする。斗從に訪はれての吟とすると、何かこの句に譬喩でもあるやうに見えるが、然らざればたと見たまゝに解すべきものであらう。

松茸や、とそれに注意して見ると、何やら知らぬ木の葉がへばりついてゐる、と闕目のまゝの作である。

松茸やかぶれた程は松の形

(俳諧會我)

「芭蕉句選年考」に

何年の吟にや未知、曾我物語集に見えたり。或行脚僧云「松茸やしらぬ木の葉のへばり付」松茸やかぶれた程は松の形」右兩句伊賀山中の吟なり。カブレはカケヤブレの略語なり、予未だ解せず、覺束なし。

とある。行脚僧の「伊賀山中」説は元祿五年とするには都合が悪いが、前句と同時の作とする説は、兩句の姿から推測して肯定し得られる、更に推測を遅ましくすれば、兩句共に四年頃京都附近での作ではあるまいか、兎にかく此句は、晋風氏の「新編芭蕉一代集」にも、元祿五年説と認めてゐるのでこゝに置く。

「かぶれ」は漆かぶれなどいふやうに、表皮のそこなはれたことである。先づ松茸を見る、その皮の剥げかゝつたやうなところは、あだかも松の古木の皮の剥けんとするもの、如くである。といふのである。

行秋のなをたのものしや青蜜柑

(小文庫)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿五年説とするにしたがふ。

蜜柑は秋の果物であるが、秋よりもむしろ冬に入つて、霜を浴びてからの方が色がよくなる。それで晩秋まだ十分に色つかぬ蜜柑を見て、やがて霜に染みての累々たる黄金色を推測し、行末の猶一層たのもしや、と詠歎したのである。

女木澤桐奚興行

秋に添て行ばや末は小松川

(陸奥千鳥)

「女木澤」は即ち「小名木川」で、その先が小松川になる。「芭蕉句選年考」に

稻葉氏家藏真蹟に、前書、九月盡の日女木三野に舟さし下して「秋にそふて行かばや末は小松川、はせを」雀の集る岡の稻村、桐奚「月曇る鶴の首尾に冬待て、珍碩」と三物有り案ずるに此句元祿五年の吟にや。「深川集」に「壬申九月に江戸に下り、芭蕉庵に越年して、今年きさらぎ洛にのぼりて風呂敷を解く、洒堂」と有り、其集に桐奚が名有り、歌仙も見えたり。

として元祿五年と見てゐる。晋風氏の「新編芭蕉一代集」發句の部に、元祿六年説とあるは誤植で、連句の部に五年とあるのが正しい。

この小名木川の末は小松川と聞くからに、我もまた行く秋に引添ふてともにそちらに行かばや、と小名木川から小松川と、段々都門の雑沓さから遠ざかつて、田園氣分にひたりたいとの意をふくんでゐるのである。

けふばかり人も年よれ初時雨

(韻 塞)

「韻塞」に「元祿壬申十月三日許六亭興行」と端書があり、「野は仕付たる麥のあら土、許六」油實を賣む小粒の吟味して、酒堂」以下、岱水、嵐蘭と五吟の歌仙がある。

森川許六はかねて芭蕉門下に参じようとしたが其機會を得ず、元祿五年八月九日桃隣に紹介されて、初めて深川の芭蕉庵を訪問し、其時「十團子も小粒になりぬ秋の風」を呈して、大に芭蕉の賞賛を得た、その十月井伊家の中屋敷内の許六の宅でこの歌仙が就つたのである。

折しも初時雨がしとくと降つて、いかにも寂びた心地である、かゝる日には若やいだ氣分では其境致にふさはしくない、よつて今日ばかりは人も時雨に調和するやうに年よつた氣分になれ、といふのである。

爐 開 や 左 老 官 行 髪 の 霜 (韻 塞)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿五年説とするにしたがふ。

爐開に出入の左官を呼んで繕はせる、その左官もいつとはなく髪髪がすでに半ば霜置くまでに老いたといふので、主じ自身も亦老いたることを思ふの意が餘情として含まれてゐる。ところでこのあるじは芭蕉自身であつて、此句は實感であるだらうか。五月に新築したばかりの庵だから修繕する必要もあるまい、さすれば五月にまだ爐をつくらずにあつたのを此時に新につくつたと見るべきか。自分はむしろ此句は芭蕉自身の關係ではなく、全く他人の境地と見る、そしてこの主じなる人は、いかさま江戸の舊家で、御金御用でもつとめてゐるらしく思はれ、それがやがては「爐開や汝を呼ぶは金の事其角」と御出入の殿様から壓迫されさうな人柄に見える。

支梁亭口切

口 切 に 境 の 庭 ぞ な つ か し き (深 川)

元祿六年の「深川」に「笋見たき藪のはつ霜、支梁」「山雀の笠に縫べき草もなし、嵐蘭」以下、利合酒堂、岱水、桐溪、也竹の顔ぶれで歌仙がある。

支梁とはどんな人か知り得ないが、その口切の茶會に招かれての吟である。「境」は「堺」で、泉州堺に、千利休が、宗祇の「海少し庭にいづみの木の間かな」に據つて、わざと樹木を植込て海をほのかに見せるやうに造つた茶庭がある、それをいふのである。支梁亭もいづれ深川邊で、樹木越しに海が見えたのであらう。

口切の茶會から利休を連想し、支梁亭の風景から利休の意匠になつた堺の庭を連想して、それをなつかしんだのである。

納豆 さる 音 しばしまて 鉢叩

(韻 塞)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿五年説とするにしたがふ。
納豆汁をつくるには先づ俎で打ちつぶす、それを「切る」といふ。俎上の納豆を打つ音がとん／＼としてゐる折から、鉢叩の瓢を打つ音が聞えて來た、その鉢叩の音をよく聞かんとして、厨のものよ、暫く納豆を切ることをやめよ、といふのである。

塩鯛の 齒ぐきも 寒し 魚の店

(薦獅子)

元祿六年の「薦獅子」にある、「芭蕉翁眞蹟拾遺」に極月三日附、意專(猿雖)宛の書翰があつて、東麓庵と西麓庵の庵號を命名し、其つゞきに

「聲かれて猿の齒白し峰の月、+角」雞や櫓焚く夜の火のあかり、只今愚庵に罷在候珍碩「鹽鯛の齒くきも寒し魚の棚、愚句」取紛れ候間早筆(下略)とあり、其角の「句兄弟」に

「兄。聲かれて猿の齒白し峰の月、其角」「弟。鹽鯛の齒莖も寒し魚の店、芭蕉」是こそ冬の月といふべきに、山猿呼んで山月落と作りなせる、物凄き巴峽の猿によせて、岑の月とは申したるなり、沾し衣聲と作りし詩の餘情ともいふべくや。此句感心のよしにて、鹽鯛の齒のむき出たるも冷じくや思ひよせられけん、衰零の形にたとへなして「老の果」年の暮とも置れぬべき五文字を、魚の店と置れたるに活語の妙を知れり、其幽深玄遠に達せる所、餘はなぞらへてしるべし。此句は猿の齒と申